

289

289-N49-47



1200500732193



始



21404

ぬ

THE PERSONALITY
OF
NAPOLEON

By. Dr. J. HOLLAND ROSE, F. B. A.

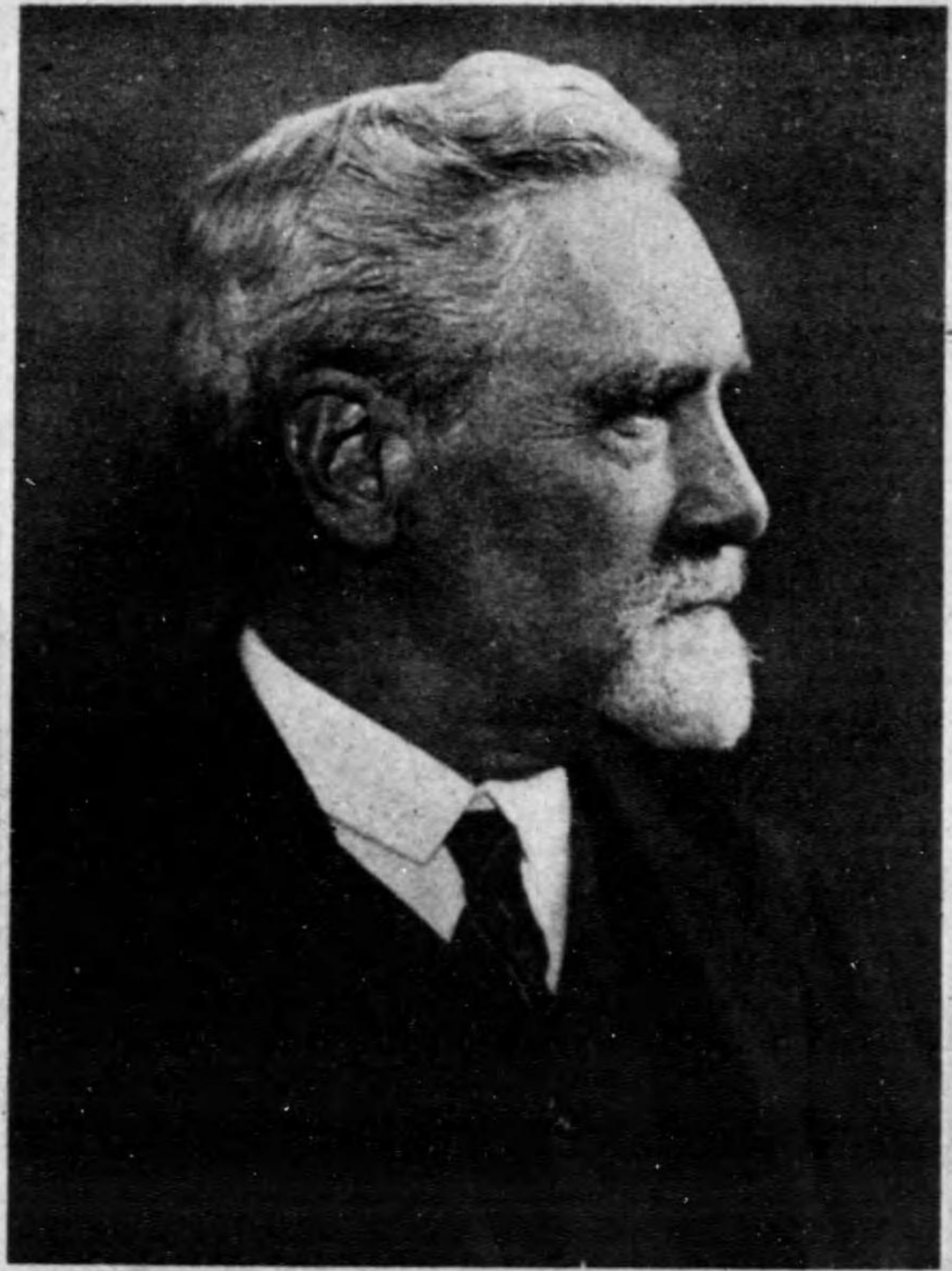
289
N49
4

ナポレオンの性格

ジェー・ホランド・ローズ著
砂川一平譯

東京富士書店版





J. Holland Rose



譯者序

いまヒットラーは全力を擧げてイギリス及びロシアと戦つてゐる。百三十四年前ナポレオンも此の同じ兩國を對手として死闘した。そして兩人共其の眞の相手として目指したのは實にイギリスであつて、ロシアと戦つたのは倒英の邪魔になる障礙を除かうとする手段に過ぎなかつた。而かも兩者の倒英の戦略は酷似してゐる。

ナポレオンは海上権力の敵に及ばざる爲めに、ブローローニユにフロティラを並べ英國侵入を策したのに對し、ヒットラーは快速艇をイギリス海峡に備へ、機を窺つてロンドンを一舉に蹂躪して了はうとしてゐるし、敵の糧道を絶たうとして、ナポレオンはエヂプトとシリアに遠征軍を派遣して、インド侵入を計つたのに對し、ヒットラーも盟友ムッ

ソリーニと相携へて、近東進出を圖り、インドの獨立を望んでゐる。イギリスの逆封鎖亦然り。一八〇六年ナポレオンは所謂ベルリン條例によつて全歐の對英貿易を禁絶したのに對し、ヒットラーも海上艦艇や潜水艦、飛行機等を驅使してイギリス及與國の艦船を撃沈して對英封鎖を行はんとしてゐる。

ナポレオンは極めて魅力ある辯舌を以てフランスの人心を捉へ、フランス兵の士氣を最高潮にまで昂揚した。ヒットラーはあの火を吐くような演説を以てドイツ國民を感憤せしめ、ドイツ軍隊をして敢然死に赴かしめてゐる。ナポレオンは中世紀のヨーロッパを近世に轉換せしめたフランス大革命の動亂を鎮靜して新秩序をもたらし、ヒットラーは第一次世界大戰の結果混亂に陥り一時赤化したるドイツを統制し、現在の秩序整然武威世界を震撼する大ドイツを造り上げた。

ナポレオンは十九世紀のヒットラーであり、ヒットラーは二十世紀のナポレオンであると云つても大して間違ひはないだらう。

ナポレオンとヒットラーはともに不世出の英雄であり、政治家として將又軍略家としてこのやうな類似點をもつてゐるが、一個の人間としてこれを觀察するとき、そこには大きな相違があり、その人間的性格の相違によつて、兩者の同じやうな行動から受けるわれわれの印象も異らざるを得ない。

ヒットラーの英國侵入策よりもナポレオンのフロティラの方が劇的な快感があり、ヒットラーの機械化部隊を先頭とするモスコウ進撃よりも白馬に跨りグランドルノーを背後に率いてニーマン河を渡つたナポレオンのロシア遠征にわれわれは詩情をそゝられる。

ヒットラーの日常生活は高僧のそれのやうに質素で總統官舎とベ

ルヒテスガーデンの山莊と戰場との間に營まれるどちらかといへば無味乾燥なものに過ぎないが、ナポレオンの私生活は今にして王者のそれを偲ばしめる豪華なもので、そこには詩があり、戀愛があり、得意の頂上に立つたかと思ふと失意のドン底に落ちまた再び起ち上るなど變化多く且つ絢爛たる彩りを帯びてゐた。こゝに史家のナポレオン研究の跡を絶たざる所以があり、われわれのナポレオンに對する興味の纏綿として盡きざる理由がある。

本書はナポレオン研究の世界的權威として知られるローズ博士が正確な史實に基きナポレオンの性格をあらゆる方面から分析し検討した名著 *Personality of Napoleon* を譯出したものであるが、支那事變が大東亞戦争に發展し、日獨伊相携へて世界新秩序建設の偉業を敢行しつゝある現下の狀勢において、一讀するのも徒爾ではあるまいと考へ

刊行することにした。

茲に寸感を述べその序に代ふる次第である。

昭和十七年五月

砂 川 一 平

目次

第一講	人間	一
第二講	ジャコベン	六七
第三講	武人	一三
第四講	立法者	一九七
第五講	皇帝	二五五
第六講	思索者	三七
第七講	世界統治者	三八五
第八講	流人	四七
附錄	年譜	
系圖		

は捕へ所のない點でシエクスピアの——を以て覆ひ隠し實相を知らしめない所の變化や矛盾を説明してゐない。尙又赤裸の彼れを世界に紹介したと、彼れ自身も云つてゐるセント・ヘレナのあの憐れな生活に於てすら、傳記の後光、即ち光輝ある過去の經歷は、動もすれば彼の姿を鍍金して、其の眞人格を觀ようとする人の眼を幻惑して了ふ。故に最も眞正な批評は、彼れの少年時代を形作つた諸事情を十分に検討すること、及び、フランスの運命、ヨーロッパの運命を形成すると共に、一方彼れ自らを形成するに大きな力を及ぼした多岐繁雜にして絶倫なる、彼れの活動を併せ研究するにあらざれば、それを得ることは困難である。一體穩かな變化の少ない性格は、それを觀察するにしても極めて緻密な點まで研究し得られる。然かし若し或る人がナポレオンを研究するのに、同様な期待を以てしたならば、丁度畫師が猛鷲の翱翔を畫かうとして、材料をガラス箱にある鷲の剝製標本から取るのと等しく、唯無益な勞力を徒費するに過ぎまい。

王者の場合ですらも居所は大なる影響を其の人に及ぼす。當面のナポレオン

も幾分かはその飛躍的奮闘的性質を、生地コルシカに負うてゐる。此の島に於ては、自然は其の恩寵を頗る注意深く島民に投げ與へた。即ち自然は或る種の活動に向つて島民を鼓舞し、怠惰に陥らない様に恩恵を節約して、漫りに與へず、而して彼等の辛勞努力に對しては十分なる報酬を恵み、其の生活を苦役ならざる歡喜に充てるものとすべく、十分な安暇を與へた。地中海の沿岸地方で、人類は有ゆる種類の生活を享受した。或地方では美術や科學が發達し、他の地方に於ては人民は奢侈に流れ懶惰に陥つた。而して又其の他の地方に於ては、地勢が峯巒起伏してゐる影響を受け、住民は原始的であつて、好戰的又冒險的の生活を送り、文化の香は極めて稀薄であつた。

此の最後のものこそ、コルシカが得た状態であつた。コルシカとイタリアとの關係は、丁度イタカのギリシアに對する關係と善く似通つて居る。兩者共に其等の本土の爛熟した文明を餘り模ねないで、却つて高地民族の好戰的な重苦しいアンダートーンを賦與されて、輕快な文明は得られなかつた。これは取りも直さず、

コルシカにせよイタカにせよ、四方は變化極り無い海に圍まれ、内地は神祕的な山嶽が重疊して居る爲めであつて、肥沃な平野で楽しい心配無い人生を味ひ得る民族の生活とは、比較され得べくもないものであつた。

コルシカは全島殆んど岩と森と、而して海に支配されてゐる。イタカと同様にコルシカは屈強にして良好なる英雄の搖籃である。「コルシカは他日世界を驚嘆させるだらう」と云つたルーソーの豫言を、其の島が珍らしくも的中させたのは不思議である。コルシカの生んだ子供等は、それを征服した諸外國民に對する不斷の苦闘によつて強硬頑健なものとなり、又其等外國民族との度重なる混血によつて、其の素質を優秀ならしめた。地中海に跳梁した民族は、上古フェニシア、ギリシアの時代から、降つてヴァンダル人、アラビア人の時代に至るまで、皆凡て彼等の血液を此の島民族の血管内に遺して行つた。故にコルシカ人の血統の根幹は大體イタリア系のものに相違ないとしても、これ等侵略者の遺した血液の接穂は、又イタリア人と多少異つたコルシカ人獨特の強靱なる木となつた。而かもそれは甘

い肉多き果實を結ぶ種類ではなく、寧ろ枳殼の様に刺多い性質を具備したものであつた。これはどうしてもさうならざるを得なかつた。と云ふのは、四方八方からの外來民族の侵寇に曝露された、此の小島民が先づ第一に念頭に置かねばならなかつたものは防禦と云ふことであり、そして若しこれに失敗すれば、侵入者を疲労困憊させる様に、勇敢と狡計とに頼りながら、森や山に逃げ込むことであつたらである。コルシカ人に取つては、海は友達であるより寧ろ敵であつた。假令海はコルシカに魚貝を供給し、其の少數の商人を助けたとは云へ、一方恐るべきバリアー沿岸の海賊を導いて來たからである。彼等はあはよく行かばコルシカの漁夫、商人、或は其の他島民の妻子を捉へて奴隸とする所のものであつた。吾人はロイド・エクスマスが地中海の海賊の巢窟であつたアルジェリアの海岸を焼いたのは未だ一世紀も経たない近年であつたことを、やゝもすれば忘れ去らうとして居る。コルシカの古文書、或は多數のマルテロ・タワー（撞木で鐘を叩いて海賊の來襲を近郷へ警告することから斯く呼ばれてゐる）は、吾人にコルシカの歴史や、全地

中海民族の歴史に陰翳を投ずる黒い影を想ひ起させるものである。

斯くの如き有様であるから、自己防衛は何物にも先立つて彼等の考に上つた。故に一人前のコルシカ人は、いざと云ふ時は誰も皆武装をした。従つて彼等の思想は粗暴殺伐に陥り易く、狩獵を好み、賞牌を獲るを名譽とし、多くこれを勳章の如く佩用したものであつた。彼等の思想が殺伐であつたが上に、規則立つたゲームを持たなかつたので、勢ひ其の武器は、相反目せる近隣の人々に向つて用ひられた。これがコルシカに有名なヴェンデッタ(復讐)のある所以である。イタリアの貴族は能く好んで馬上試合や擬戦を行つたが、これに對してコルシカの酋長はヴェンデッタを演じた。不正行爲や侮辱、殊に甚しいのは唯高慢な顔付をされたばかりに、血を見ざれば止まぬ争鬪を惹き起した。コルシカ人は餘り法律には注意を拂はなかつた。それは長い間彼等がジエノア政府の命令以外何物をも知らなかつたのと、それを自ら暴君の命令の如く忌み嫌つたのに原因してゐる。ボスウェルは興味深い其の著書『コルシカ物語』に於てコルシカ人の復讐を全く此の島民が

ジエノアの法律を守らず、又それを嫌忌することに歸し、而して更に、コルシカの擁護者パオリは此の悪い習慣を打破することに成功したと云つてゐる。然かし此の二つの論斷は共に誇張の言に過ぎない。なぜならばヴェンデッタはジエノアがコルシカを統治した時代よりも、ずつと以前から此の島に行はれ、又パオリ以後も絶えたことはなく、或る程度に於ては今日までも残存してゐるからである。ボスウェルは別に此のヴェンデッタの起りをコルシカ人の烈しい感情に歸してゐるが、此の方が前の論斷より遙かに眞に近い。彼等はコルシカ人の烈しい感情は、人々の氣分を極度に神経過敏ならしめる其の島の高温度の氣候の爲めであると云ふ。而して更に曰く『彼等は強烈なる熱情旺盛にして且活躍的な精神を有する人民である。此等の性質は人をして善惡いづれの方面へも甚だしく偏らしむるものである。』と。ヴェンデッタがコルシカ島民の性質に及ぼした感化影響は極めて深刻であつた。其の感化は島民を寡黙にして疑心深く、復讐心強き種族たらしめた。事實上國法が無かつたので、一族一家の榮譽は第一に彼等の念頭に浮

ぶ重要なことであつた。戦争、狩獵、同族の地位の向上、乃至血統の保持等は彼等の生活を左右する重要な要素であつた。

註、ナポレオン曰く「コルシカ人の想像と熱情は頗る強烈である。而して此等の性質を了解することは非常に困難である。」と。

コルシカ人は此の氏族制度の特長と缺點の兩方面を吾人に示めしてゐる。彼等は動もすれば朋黨を結び結社を作る統治に困難な種族であつたけれども、一方に於ては酋長によく依附してゐた。島民に取つては酋長に背くことが、不名譽、破廉恥の最なるものであつた。或る時一人の若者が酋長に反いたが、其の父は息子と町の入口で出逢ふや忽ちこれを射殺して了つた。然かし、彼等の社會に於ては此の行爲を賞讃こそすれ咎むるものは誰れ一人なかつた。酋長の爲めに命を棄てることは光榮ある行動とされてゐたのであつた。そして斯くの如き武俠的精神は、島民をして文明人が驚く程忍耐強く大膽な行爲を敢てせしむる様それを鼓

舞激勵した。コルシカ人は正規の軍隊を有たなかつた。さればバオリがボスウエルに「吾人は過去に於ては必然の結果として軍隊の勇敢さを有たねばならなかつた。現在各個人其の儘が一聯隊である。然かし若し過去にコルシカ人が正規の軍隊を編成してゐたならば、恐らく現在吾々の間に認めらるゝこの勇敢な行爲を生み出す、個人的勇氣を喪つて了つたであらう。」と云つてゐる。これと共に島人の心情は恰もコルシカ近海の様に変化し易く、コルシカの山岳の様峻猛粗野であつた。されば何人と雖も嘗てコルシカ内地の人民を完全に撫馴することに成功したものはなかつた。ジ・ノア人がこれに失敗し、それに續いたフランス人も亦失敗した。

ナポレオン・ボナパルトは此の様な原始的社會に於て其の都であるアヤッシオに生れた。それは千七百六十九年八月十五日のことであつた。時恰もコルシカは一島興廢の岐路に立ち頗る緊迫せる危急の場合であつた。即ちコルシカ人は漸く衰境に入つたジ・ノアから其の島を譲り受けたフランスの羈絆から擺脫し

ようと奮闘して居たのであつた。ナポレオンが生れたのは丁度此の時であつたので、彼れが幼少時代に浮ぶ第一の聯想は、フランス民族——即ち後年彼れが光榮名譽の頂點に上ぼらせた民族——に對する憎惡のそれであつた。彼れは二十歳に達するまで衷心からフランスのコルシカ併合に對する反抗者であつた。此の爲め此の人間の構成期に於て、彼れの有する反抗的諸性能は異常なる發達を遂げた。蓋しナポレオンの一生は奮闘を以て終始した。實に彼れの奮闘的生涯は、其の生誕の日より始まつたと云ふべきである。ナポレオンの父母はフランスとの戰爭中、どうしても家に安閑としてゐることが出来なかつた。されば彼れが後年フランスの統治者となつた時、社會が柔弱遊惰なのに憤慨して、或る日例の精悍な氣宇を漲らして、『余の生れる前、我が母はコルシカ中の山や峰を馳け廻つたものだ。』と叱咤したのであつた。恐らく此の頃の艱難や辛苦が、人に感服と而して遺憾の念とを起させるあの鷲の様に俊敏な顔付や態度を具ふる機略縱横の青年を作り出したのであらう。然かし彼れの性質は堅實であり、神經は鋼鐵の様であつ

た。而して彼れの決斷力に富める意志は斷えざる危險の壓迫の下に強められて行つた。一體個人の精力は——一國民の精力も同様であるが——其の幼少時に於て不如意な事に遭遇することによつて強められる。即ち永い間ムーア人と抗争したイスパニア人、又自然やイングランドと争つたスコットランド人は、共に彼等を征服者或は嚮導者として世界のあらゆる方面に送つた貴い剛毅な性質を此の爲めに體得せしめられたものに他ならぬ。近世のイタリアは常に外敵と接觸した北イタリアの雄勁なる人々によつて造られた。されば若しナポレオンにして少壯時代屢々戰爭や困難に慣らされなかつたならば、あれ程までに出世を遂げられなかつたかも知れない。イタリアはナポレオンに透明なる頭腦を與へ、コルシカは彼れを武將とした。

子供の性質を分析するの爲めに家族の素質を研究することにばかり頼るのは間違つた遣り方である。一家が一堂に居る様な小家族の而かも平凡な小兒です

ら、往々遺傳の法則を無視する。であるから假令或る人が唯生物學の原則によつてのみ大天才を作らうとしても、結核は擬物を作るのに過ぎないだらう。眞に宇宙の大精神は往々に我が地球に降下して來り、而して一小兒の本體に回天の大業を爲す力を植ゑ込む。これに引換へて或る場合には同じ様な運り合せて土偶に等しき放蕩兒が生れる。昨年麒麟兒を載せた搖籃も今年は豚兒を乗せる。而して千七百六十九年八月時を得たる搖籃は不世出のナポレオンを收容した。蓋し大自然不可量の力は「偉大」を構成すべきナポレオン一家の諸要素を極度まで増大したからであつた。

遮莫、ナポレオンはコルシカ人であり、又イタリア人でもあつた。彼れの父の性質即ち文學や哲學を嗜み、働き好きで世才に長じた性質が、多くの特徴を持つてゐるナポレオンの性格の中、社會的方面とも稱せらるる所に現れてゐる。ナポレオンの父カロロ・マリアド・ボナバルトは、バオリの指揮の下に戦争に参加したが、闘士は其の適り役でなく、性來帷幄に參じて策を運らすべき人物であつた。然かし彼

れの性質は、堅忍不拔の精力に乏しかつたので、折角計畫したことも、其の効果を擧げ得られざることが少くなかつた。後彼れは武俠の精神に富めるコルシカ人に似もつかぬ態度でフランスに降つたので、ナポレオンは後年父の斯る行動を甚だ快しとせず、輕蔑の眼を以てこれを見た。とはいへカロロ・ボナバルトは多趣味な、そしてアカデミックな教養ある様に見える一個の才子であつた。彼れは此の様な學者的態度を保持して居た爲めに、地方自治制の上に、或は法律的方面に相當用ひられ、彼れ自身も亦それを希望して居た。彼れは辯護士であつた。そして名譽觀念と利益觀念に敏かつたので、アヤッシオで地位と利益とを求めんとして、異常の熱心と著しく籌略に富める能力を示した。而して此等の熱心と努力とに加ふるに、ボナバルト家の勢力と妻レチチアの里方の勢力とが、遂に世間で彼れを顧るまでに至らしめた。けれども若し彼れに落ち着きがあり、そして策を用ふることが少なかつたならば、多分其の成功を確保し得たであらうが、賣恩的行爲が餘り強かつたので、終にフランスの官吏に不快の念を抱かしめ、又友人にも倦きられて了

つた。其の結果彼れの努力は却つて反對の結果を將來し、遂に失意の境遇の中に其の身を終る様な場合に陥つたのであつた。即ちカロロは不如意の境地より起つて、最後は再び事實上の破産に終つたのである。彼れが當時十五歳であつたレチチア・ラモリノと結婚した日に於ては、妻のものを合せても、金に換算して僅か一萬四千フランにも満たざる財産を持つに過ぎなかつた。此の貧困に加へて、早くも子供が生れたので、それを育てる爲めに、種々考を運らしたが、巧く行かず、収入は増加せず、到底十分に一家の生活を維持することが出来なかつた。

斯う云ふ風に始終家計が困難であつたから、大抵の婦人ならば意氣沮喪して了ふのであるが、レチチアは、却つてその爲めに彼女の主婦としての獻身的態度と斷乎たる節儉手段とを發揮したのであつた。レチチアの系統には大剛の人が多かつた。其の家はボナバルト家と同様中世イタリアに於て可成りの地位にあつたが、十五世紀の末頃にジエノアからコルシカに移住して來た。コルシカに移つてもラモリノ家は大概いつでもイタリア系統の家族と血縁を繋いでゐた。然かし

ながら當のレチチアは幾分かギリシア系の血筋を引いてゐる。レチチアの母、即ちナポレオンの祖母は、コルシカ内地の好戰的種族から出たビエトラサンタ家の人であつた。其の故かレチチアは彼の女自ら意志の堅固な、人に屈しない、男性的の性格を修成した。此の性格こそナポレオンの性格に甚大なる影響を及ぼした所のものである。ナポレオンの性格中、父の方から遺傳した活動好きの、又畫策を好む性質は、彼れの性格の全部を占むるものでなく、其の一部分であり、これに對立してゐた剛毅な性質は、實に母親よりの譲りものであつた。レチチアは子供達を質素に成育した。これは其の生活が豊かでなかつた爲めでもある。又非常に注意深く育てたが、これは彼の女がよく氣の廻る機敏な性質に具へてゐたからであつた。而かも其の養育法たるヤスパルタ的の嚴酷峻烈を以てした。此の嚴格な教育は實に子供達が我儘であつた爲めであつた。レチチアは嚴格ではあつたが、子供達は此の母を愛慕してゐ、又彼の女が答を揮ふことに容赦しなかつたが故に、却つて子供達はよく敬服してゐた。確かナポレオンも十七の時に一度母に體罰

を受けたことがあつた。それは或る時彼れが祖母の跛歩を引く歩き振りを真似て馬鹿にしたことがある。眼敏いレチチアは早くも此のナポレオンの悪戯を見付けたが、其の時は何とも云はずに時機の至るのを待つた。或る日レチチアはナポレオンに、社交上の宴會へ出席するのだから二階へ上り衣服を着更へよと命じた。そしてナポレオンが二階で更衣すべく裸體になつた時を計り、彼の女は藤の簀で力一杯にナポレオンを殴りつけた。流石年少士官のナポレオンも、母の此の合法的答刑には當然服従せざるを得なかつた。此の様な場合レチチアの剛毅な精神と、男の様な腕力とは、能く其の巧妙な手段を振るはしめたのである。此の場合に於けるレチチアの敏活な行動の中に、其の子が後年カスチグリオンやアウステルリッツで執つた機略そのまゝの姿を豫見し得るではないか。

斯の様に炯眼で剛毅であつたレチチアの子供達は、皆大體に於て敗け勝ちのない能力を示してゐた。夭折しないで生長した子供の中、最も年長のジ・セフは可成り手腕ある外交家となり、擾亂の時は別として、平時に於ては相應立派な統治者

であつた。ルシャンとエリザは智的能力と行政的才能を示してゐ、ルイは氣六ヶし屋ではあつたが又伶俐であつた。ポウリーヌは軟弱なイタリア風を好み虚飾的生活を送り、末子のカロリーヌとジ・ロームも姉(ポウリーヌ)に劣らない情事を有つ人物であつた。だが兎に角、強情頑固又逸樂を好む諸性は、彼の女(レチチア)の子供のどれにも現はれた性質である。然かし大天才の性能が現はれたのは、獨りナポレオンばかりであつて、ジ・セフ、ルシャン、エリザ、ルイの四人は、單に手腕家と云ふに過ぎないものであつた。

ナポレオンは短軀^註彼れの身長は約五呎五吋であつたなる點に於て、又危險を顧慮せず、富を蔑視する頑固な性質に於て、殊に其の家系を誇る點に於て、コルシカ人の特性をよく享受してゐた。而して其の家系を誇る精神は、實に後年母レチチアをフランスの最高貴婦人の地位に推薦し、兄弟達を隣國の王位に即かしめた。ナポレオンがコルシカ人の性質を能く享けてゐると云ふことは、彼れ自身も認めてゐて、嘗てコルシカ人は粗野だが根本的に正直な種族だと云ひ、續いて彼れ自身も

亦粗野であるけれども正直だと述べてゐる。又彼れは常に自分の享けた利益を充く記憶してゐて、充分にこれに報い、それと共に不正行爲や侮蔑されたことは、非常に鋭敏にこれを感じて大概はそれに復讐した。然かし彼れは友情に厚く多くの舊友を登用した。即ちデ・ノーを其の當然受くべき報賞よりも遙かに高い恩典的地位に昇らしめた如き其の一例である。而して此の様に兄弟や僚友を彼等の能力不相應な地位まで出世させたことから、彼れ晩年の困難の大部分が生れ出でた。これは此の大統治者に取つて惜むべき缺點であつた。然かし一方から見ると、又此の點の爲めに彼れが人として尊敬されるのである。彼れは往々彼れを畏敬してゐる臣下に、首長としての尊大振りを以て臨んだが、『忠誠』なることの如何に偉大な價値を有するかを知つて居て、忠誠なる言行を示した人々は重くこれを賞した。其の中でも千七百九十三年の春、コルシカの内亂中、ナポレオンを能く勇敢に護衛したニコラ・フレートの子を厚く遇したことは特記すべきことである。其の時、未來の世界の征服者たるナポレオンも、勝ち誇つた反對黨バオリ軍の

暴威から脱れる爲めに、餘儀なく身を以てアヤッシオから遁走せざるを得なかつた始末であつたが、ニコラ・フレートは徒歩でナポレオンを護衛して間道を逃げ、遂に非常に危険な位置から彼れを救つた。ナポレオンは常にこのことを記憶してゐて、死ぬ時遺言により一萬フランを此の忠實な護衛者の子に贈與したのであつた。

註、ボーセーは其の著、ナポレオン朝廷に於て、ナポレオンの身長を五呎七吋と云つてゐる。ボーセーはナポレオンの侍従であつて、最も信じ得られる人物である。

ナポレオンの性行に關する文書は、同様に彼れが深く遺恨を忘れない驚くべき例證を載せてゐる。彼れはウォートルローで復活の歩を阻止されたウエリントンを暗殺せんと努力したフランス將校のカンチロンに一萬フランを遺贈した如きそれである。如上の義侠的行爲と遺恨を忘れない性質は、兩つながら、ナポレオンの性格中に根深く植付けられたコルシカ人特有の性質である。彼れは幾度ならず、素晴らしい天稟と、怖るべき復讐とを以て世人を驚倒した。彼れがダンチ+

ン公を死刑に處した時、彼れ的一幕條は偽らない言葉で大膽なる批評を敢てした。曰く『第一統領(ナポレオン)は彼れの郷土の風習に還元しつゝある』と。それから五年後、イスパニアのブルボン家はナポレオンより致命的の武力壓迫を蒙らねばならなかつた。それはブルボン家がイエナの戦の際、彼れに向つて挑戦したことに原因する。此の時ナポレオンは鬱憤を巧みに隠蔽して時期の到來を待つた。そして千八百八年機の熟するや、同家を如何に跳いても脱出し得ざる滅亡の淵に叩き込んで了つた。加へられた侮辱を復讐すべく始終忘れなかつたと云ふことは、彼れとして如何にもさう有りさうなことである。而してその復讐の方法は、ナポレオン其の人及び其の種族特有のものであつた。自制沈黙の待機、ブルボン家に家内騒動を起して、家中を王黨と王子黨の兩派に分裂せしめた謀計、而して最後の猫の鼠に對する如き飛躍は、フローレンスの歴史に出て來るエピソードによく似てゐる。フランス人の天性はもつと開放的であり、もつと陽氣で無頓着である。されば彼等は祕密な仕事をやるのに大概失敗ばかり招いてゐる。フランス革命

欠

欠

1)の仁慈に富める言行は、第一統領をして穩健なる政治を執らんが爲めに、諸政黨を糾合せんとする決心を強からしめた。以上述べた總べての點に於て、又偉大なる公共事業を遂行した點に於て、ナポレオンは第二のシーザーであつた。不思議なる哉人類の運命。殆ど十八世紀の間耕されずして眠つた全ローマ民族の政治的能力は、今や再び彼等の種族にして一孤島に生れた其の末孫に現はれたのであつた。

几帳面で且他に頼ることをしない古代ローマ人の性質は、ナポレオン・ボナパルトの性格の中にも早くから現れた。ナポレオンの精神上の修練は、彼れ自身が贏ち得た所のものであつて、他人が注ぎ込んだものではなかつた。彼れはブリエンヌでは僧侶からパリーの兵學校ではフランスの官憲から授けられた教育に對しては、餘りしつかりした見解は持つてゐなかつた。然かし彼れがフランスの學校を好まなかつたことは確かである。其の時分から千七百九十年まで、ナポレオンの心持ちは頗るコルシカ的であつた。彼れは故國の征服者としてフランス人を

憎んだ。パリーの兵學校では、學生の大部分を占める貴族の子供達を輕蔑した。それから進んでは、コルシカをフランスの統治から離脱させようと渴望した。是れはナポレオンが、千七百八十七年から九十年までの大部分を占むるヴァレンヌ及びオーゾンヌ兵營生活中、餘暇あれば一生懸命に歴史と戰術とを勉強した理由を説明する。此れらの研究に對し彼れが精神と勞力とを集中したことは非常なもので、其の結果貧乏な一尉官として驚異に値する程、近世史の知識と數種の科學に關する知識とを得た。彼れが物を研學するに當つては、注意深い、丹念な學生がよくやる様に、研究題目の摘要を作り、資料を化して大脳の成質と爲したのであつた。現在残つてゐるナポレオンのノートブックは、彼れの秩序的才能の優れてゐたことを物語つてゐる。此の才能こそ實に、物事を巧みに整頓し、咀嚼し、それを組織立てることに成功する神祕な力の一つである。彼れの頭腦は、百事をぼんやりと遠くから觀察し、明瞭を缺くとも不満を感じず、又他より注入された知識で飽和してゐる底の通常の頭腦とは異なつたものであつた。大體學生時代のナポレオ

ンは取扱ひ憎いヒネクレ者の傾きがあつた。然かし一旦彼れの精神が覺醒してからは、其れは強馬力の機械の様に、手のとゞく範圍に來るものは何でもすべて碾き碎いて消化し、或は秩序立て、一旦用ふべき日に備へた。彼れの勉強は總て軍事教練の餘暇にされ、而かもそれを續けるには不都合な健康状態と貧困との中間になされた。然かし約二年に亙る此等研學の結果書き著はされた所のものには驚畏すべきものであつた。即ちマッソン氏著『無名のナポレオン』は其の三百六十八頁を、此等ナポレオンの研究論文で以て充たされてゐる。三百六十八頁と云へば今日に於ても立派な單行本ではあるまいか。

此等論文の質と内容の變化に富むことは、亦其の量に匹敵する程立派なものである。彼れは將校集會所の新律令を作成したが、これは其の政治的努力の最初のものとして云ひ得る。又彼れは砲術に關する長文のメモランダムを、而かも四つ書いた。更にクラシックに向つては、プラトリーの共和政體論の第一篇を略説し、古代ペルシアの政體又スパルタ及びアテネの政體に關する意見を發表し、或は古代ギリ

シアの地理に就ても書いた。而して歴史的方面では、エチプトとギリシアの歴史を略述した。殊にカルタゴとアッシリアの歴史は、彼れの取り別け好んだ所のものであつた。レイナルの東西兩インドに關する書物は、彼れの帝政中の諸政策中最も重要だつた植民地問題と、帝國主義の問題に、初めて彼れの思想を駛らせたものであつた。それは多分同地方に於けるイギリス、フランス兩國の衝突からであつたらう。又その上それは彼れに千六百八十八年即ち名譽革命までのイギリス史に非常に注意深い研究を拂はせるに至つたものであつた。

彼れの研究はこれに止まらなかつた。更に進んでアラビア人の歴史を研究し、それに關連してヴェニスの政體をも研究した。これはそれらが地中海東部沿岸地方と深い關係があつた爲めと信ぜられる。斯く其の研究が廣範圍に涉つたにも拘らず、彼れはフランスの歴史には餘り注意を拂はなかつた。それは學校で教へられたのと、それに特別な感興を持たなかつた爲めである。地理や生物學方面の自然科学も亦ナポレオンの思想に重要な位置を占めてゐた。即ち彼れが生物

欠

欠

ルシカ人にあらざるなり。云々。

此の發想の殘部も亦これと同様の熱情を以て書かれてゐる。否な殆んどそれは一種の田園詩的な緊張を示してゐる。而して吾人は此の論文中所々に自我主義の片影が現はれてゐるのを見ると同時に、一種の自負心に充ち又感情に富むナポレオンの性質の躍如としてゐるのを感じる。然かしナポレオンのコルシカに對して義務を感じる觀念は壓倒的なものではなかつた。彼れに取つて生活は、マッヂニに於て見る様に、天から與へられた使命でなくて、向上發展の道程であつた。彼れは其の時のコルシカ人が既に前年バオリ活躍時代の強いコルシカ人でないのを知つて、面倒な生存を打ち切らうとしたのであつた。ナポレオンが厭世觀を抱く様になつた原因は、この外に常に彼れを惱ました貧困であるが、この二つを除いては、吾人は何故に彼れが身の不幸を嘆いて世を厭ふ心を起したかを知るのに苦しむ。恐らく四圍の事情の不如意なのが、彼れの性急な精神を焦勞させたか、或

はコルシカ人をフランスに對して起たしむる計畫の失敗が、彼れに世を傳まさせたかに存する。斯の如きナポレオンの内觀的思想が、どうして後年反對に外延的となり、又退嬰的だつたものが進取的となつたかと云ふことは、付度揣摩に屬する事柄であるが、兎に角彼れはセント・ヘレナに流謫された晩年になつては、自殺は卑怯者のすることであつて到底丈夫子の爲すべからざるものであると聲明して、それを否認し去つたのであつた。

男らしからざる言行を嫌ふと云ふことは、或はこれナポレオンの抱いた不撓の精神の深き本源であつたのではあるまいか。又この變化は彼れの精神の中に何か朗らかな田園詩が注入されたのではあるまいか。ナポレオンはヴァレンスに幾月か滞在在中に、下宿の娘であるコロンピエ嬢と戀に陥つた。ナポレオンはセント・ヘレナで、從者として同島に隨いて行つたラ・カイズに向つて次の様に云つてゐる。「吾々二人はこの上なく無邪氣に振舞つた。二人は餘り度多くは逢はなかつたが、自分は今でも尙、或る眞夏の曉明の會合を憶えてゐる。卿はそれを信ずるこ

とは困難だらうが、吾々二人の全幸福は、二人が一緒に櫻の實を食ふことに存してゐた。」と。吾人は茲に勉強の爲めに幾分色ざめた青黄い頬の十七歳の青年が、今總べて滲徹する如き旭日の耀に愉快さうに照らされたプロヴァンス族の處女の顔に、其の眼を樂しませてゐる所を想像出来るではないか。吾人は美術家が古來ナポレオンの種々な場面を畫いたに拘らず、なぜ此のシーンを繪にしなかつたを不思議に思ふ。此の時こそは疑もなく彼れの生涯中最も幸福な時であつたに違ひない。櫻の女精が傍に居る時に、どうして自殺なぞが考へられよう。だが二人の戀は永續しなかつた。間もなく彼の女は彼の女が樂み多く且純潔たらしめ得たナポレオンの生活から別離して了つた。

吾等はナポレオンを頑固な嚴酷な、又剛情我慢の人物であつた様に思ひ易い。疑もなく彼れの晩年になつては其の通りであつた。そして此の性質の變化を述べるのが本書の目的ではあるが、差し當つて少し、其の少壯時代は、可成りに情に富んだ性質を有してゐたことを研討して見よう。若しナポレオンが、其の成育され

たフランス革命の殺伐な時代よりも平和で幸福な時代に育てられ、そして何不足なく尋常の経路を歩いて行つたならば、彼れの性質は凡べての點に於て圓滿に形成されたであらう。而して彼れの言行に現れた強い力には、一層明瞭な易感性が附帶せられたであらうし、又他を制御するに確乎たる力を有した彼れは、人々をより一層光輝ある將來に導いたであらう。自然は一ナポレオンをして、殆んどあらゆる點に於て、榮譽と善行とに充てる經歷を履ましむべく見えた。彼れは一體、腦裡に幻影を畫く空想家の一人であつた。而して諸條件が巧く整つたならば、其の夢想を實現にまで齎し得る人物であつた。

然かしながら總てのことは其の様に巧くは行かなかつた。コルシカに關する事件でも、フランスの事に關しても、否な彼れ自身のことには就ても満足に運ばなかつた。乃ち甚だしい失望が千七百九十二年九月、フランス共和政府の成立發表後程無くナポレオンの上に落ちて來た。彼れのジャコベン黨員としての經歷については、次講に述べるとして、今此處で敘述する必要があるのは、彼れに起つた第一

の心的衝動に就てである。千七百九十二年九月から翌九十三年の六月まで九ヶ月に亘り、ナポレオンはコルシカで、フランス共和政治の爲めに、反對黨と惡戰苦闘を續けたが、其の結果彼れはコルシカから脱走するの餘儀なきに至つた。そこで彼れはフランスに上陸して、家族と一緒にプロヴァンス州に一時の隱家を求めて移り住んだが、遂に千七百九十四年七月にバリーの政權を掌握したテルミドリヤン黨に依つて虐待せらるゝの憂目を見ることになつた。同黨員は瑣細な罪名の下に彼れを獄に投じた。然かし其の入獄は餘り長いことはなく、やがて彼れは釋放されたが、突然今度は王黨に屬する農民と兵を構へたヴェンデアン戦争に於て、歩兵を指揮する様命ぜられた。けれどもナポレオンはこの任に就くことを肯じなかつた。而して其の精神的不安の一象徴と見られるものであるが、千七百九十五年の晩夏に、コンスタンチノーブルに赴き、トルコの砲兵を改造することを當路者に申出でた。此の時は既に彼れは心からフリーランス(中世の雇武士)となつてゐたのであつた。二十六歳のナポレオンは斯く感傷的の人物であり、迷蒙より覺

醒した熱情家であつた。

ナポレオンが青年時代に有つてゐた種々の情緒の中で未だ十分に説明されないものが唯一つある。即ち彼れの戀愛については未だ詳しく説明されてゐない。ナポレオンは此の時既に此の方面では無垢でなかつた。と云ふのは、吾人は千七百八十七年にパリーのパレ・ロワールで一娼婦と關係したことを書いた彼れ自身の記述によつて、さう判断し得るからだ。此の記述は非常に巧妙に書いてゐて、描寫眞に迫つてゐる。而して其の記述の特色は、彼れが一娼婦に關係した事柄を、當時彼れ自身が口で説明すると共に態度行動を以て實行した道德的言動の根本原則を破壊せざらんが爲めに、單に作文の練習題目として軽く扱ひ去らうとする折角の試みに逆らつて物語られてゐる所に存する。此の如き題目を道德的青年が、其の態度を改善せん爲めに果して撰むであらうか。

此の外ナポレオンの戀愛に就いて千七百九十四年に起つた一つのエピソードは、前のに比して猶更悪いものであつた。彼は當時マリタイム・アルプス方面に策

欠

欠

つてゐる。己が心を打明ける樂みを味ふよすがもない。御身は予から予の精魂より以上のものを奪ひ取つてしまつた。御身は予の生涯に就て配慮すべき唯一人である。予が任事の氣苦勞に疲れ果てた時、予が仕事の成果を疑ふ時、他人より愛想づかしをされた時、又自ら吾が生涯を呪はんとする時、予は御身の肖像が相共に鼓動してゐる心臓の處へ手を置く。尋でそれを取り出して見る。戀は予に取つて缺くる所なき幸福である。而して吾が愛人の傍遠く離れたことを思出づる時を除いては、萬象は悉く喜に笑つてゐる。……嗚呼我が美しき妻よ、如何なる運命が余を待つか、それは知らない。然かしそれが予を御身より、將來長く引離して置くならば、それは到底予の堪へ得られざる所である。而して恐らく予の精力は永續すること能はずして、消滅し去るであらう。嘗つて自分は自ら己れが精力を誇つた。又或る時は人々の企てた種々の障害を、定まれる運命として、何等恐怖に色をも變へず、信じ得られざる程度、のそれら(障害)を諦視するの勇氣があつた。然るに今日は、吾がジ・

セフィンには病みつゝあるにあらざるやの憂慮に殊に彼の女は予を棄てたるにあらずやとの惨酷にして致命的なる心配に精神を凋萎し、血行を止め、失望落膽し了る。而して斯く考ふるもそれに怒り、それを斷念するの勇氣すら、残つて居ない。予は常に能く遺憾なくして死ぬ人に、優るものなしと云ふ事を云つてゐる。然かし今日御身の愛なくして死し、御身の愛を確實にせずして死ぬは、予に取つて地獄の苛責に等しきものである。それは絶對なる寂滅の恐ろしき表象そのものである。予は咽喉を締める如き情熱を感ずる。

ナポレオンがジ・セフィンに對して熱情を抱いてゐたのと反對に、ジ・セフィンはナポレオンがイタリア遠征の留守中、パリに残つて繁華な都會生活に、自分の主人を忘れたかの様に振舞ひ、薄情で不眞面な性格を示してゐた。ジ・セフィンのナポレオンに手紙を出すのは極めて稀れで、又文意も頗る冷淡なものであつた。千七百九十六年六月十七日に、ナポレオンはトルトナからジ・セフィンの無

沙汰を非常に心配して、次の様な手紙を寄せた。『予は常に幸運である。運命は未だ嘗つて余の意志を阻止したことがない。然かし今日予は非常に自分を惱ますものゝ爲めに心を傷けられてゐる。ジ・セフィン！御身は如何にして此の様に長い間手紙を寄こさずに居られるのか。御身の寄せた最後の簡単な手紙は五月二十二日附のものである。而かもその手紙は予につれないものである。然かし自分は何時でも、それをポケットに入れて置く。御身の肖像畫と手紙とはいつも予の眼の前にある。』と。而して其の年九月十七日に、ナポレオンは又ヴェ罗纳からジ・セフィンに手紙を出して云つた。『予は屢々御身に通信するのに、御身から手紙を寄せるのは甚だ稀である。御身は頗る我儘で而かも不貞淑だ。不貞淑なるが故に予に無關心であるのだ。憐れなる夫情愛深き情人を欺くのは不實である。』と。其の後又今度は一ヶ月経つてモデナから手紙を彼の女に送つて同様のことを云つてゐる。曰く、『御身の手紙は、恰も既に御身が五十歳の老年に達したかの様に温味がない。吾等二人は宛然十五年前に結婚したかの様だ。人々は

吾々二人の間に單純な友達の間に見る友愛か、或は人生の冬である老人の氣持を見るのみである。何と云ふことだらうか。ジ・セフィン！それは御身が非常に我儘であるからだ。不信實だからであり、又不貞淑であるからだ。實際御身は何を予に憐愛の目的物とすることが出来るのか。御身はもう予を愛さないのか。噫、萬事已に休す。御身は予を憎むか。宜し！寧ろ其の方が宜い。惡意以外凡べてのものは氣の抜けたやうだ。凡べて行詰つた。否、環衆悉く冷酷だ。血の氣がない。嚴酷な睥視を投げる。單調な態度だ。……無限の眞心籠めた接吻。』

然かし四十八歳になつた時、ナポレオンはセント・ヘレナで侍臣グールゴに云つた。『誰も五十歳に達すれば既に戀はない。ベルチーニは始終戀の中に浸つてゐた。然かし予の心は已に無感覺になつてしまつた。予はジ・セフィンに對して幾分か戀を感じた外は、未だ一度も戀なるものゝ味を知らない。そして予がジ・セフィンに對する戀に於てすら、餘り深みに入らなかつたのは、彼の女と相知つた時既に二十七歳であつたからだ。而してマリアルイザに向つては、戀よりも寧

ろ深い友情を抱いた。』と。此の言葉は甚だ興味深いものである。山奥の谷川は暴風雨に際しては、水勢激奔し泡を立て、漲溢するが、早魃になると急に干上つて、何處に激流が流れたのか知らぬげである。然かしナポレオンの如く、ジ・セフィンを熱愛した人が、後日此れを單に若い時の偶然な出來事とより認めざる例が他にありや、自分はそれを疑ふ。然り、ナポレオンの心は此の時既に幾多の戦争と、あの悲惨な大失脚とによつて、青銅化して了つてゐたのだ。然かし假令ジ・セフィンが不眞面目で又薄情であつたにせよ、あの愉悅の記憶は其の胸臆に残存して居可き筈である。此の時ナポレオンの性格中には、他の活動家の性格に於て多く見る如き、彼れを圍繞した或るものがなかつたのであらうか。ジ・セフィンを大切ににしてゐた時分のナポレオンは、バリーで勉強して居た頃の、病的に自己中心主義であつた青年とは、全然異なつた性格の所有者であつた。イタリア遠征の頃、飽くを知らぬ戀の樂しき憧憬に耽つてゐた彼れは、精神活力の頂上に立つてゐたものと云ひ得る。然るに此の樂しい憧憬が漸次消えて行くに伴れて、彼れの人生觀も

亦次第に沈鬱のものとなり行いた。軟い感情は凋萎した。殊に彼れがエチプト遠征の留守に、ジ・セフィンが敢てした不行跡を聞いた時、彼れの心は焼き盡されてしまつた。されば其の後二十年、セント・ヘレナに於て、未だ人生の冬の來らざるに、彼れは既に嘗て自ら熱烈なる戀愛を感じたかどうかをすら疑ふに至つたのだ。何と云ふ精神的悲劇であらう。それはあの政治的大失脚に比肩し得るものである。ナポレオンが彼れに應しい配偶者を得なかつたことは、恐らくあの滅亡に幾分の關係があるに相違ない。若しナポレオンにして温い愛情を有し強固な意志を持つた婦人を配偶者として得たならば、彼の女は彼れの生涯に於て遭遇した數回の危機に當り、能く彼れを正道に導き、其の忿怒を柔らげ、瞋恚を稀薄ならしめ、而して彼れを圍らすに、國民の獻身的精神の破るべからざる城壁を以てしたのであらう。ジ・セフィンも度々此の如きことを爲すべく努力した。然かし、彼の女はこれらのことを爲すには最後まで使用せねばならないナポレオンを導く力を疾うの昔に失つてゐたのであつた。

然かしナポレオンにも缺點がなくはなかつた。彼れの精神的生活の最盛期であつたイタリア遠征の折に於てすらも、其の素行は正しいものではなかつた。セント・ヘレナに流された後、彼れは都合七人の情婦を持つたことを自白してゐる。然かし彼れはボーランドのワレウスカ伯爵夫人に對する場合に於てのみ、心からの熱情を注いだのであつた。而してナポレオンが後になつて此等のことを話すにも、其の言葉は甚だ卑猥な肉慾的であつた。セント・ヘレナでの彼れの言葉は非道德に流れることが少くなかつた。彼れは一夫多妻論と蓄妾論を好んで主張し、其の當然の結論として、『婦人は男子に服従すべきものである』ことを附説した。又彼れは由來西洋に於ては女子は餘り男子と同等に取扱はれ過ぎるが、東洋では女子を劣弱者として男子の左に置くと云つた。要するにエマーソンやジョン・コッドマン・ロースに依つて達せられた所の結論、即ちナポレオンは紳士でなかつたと云ふことには、多くの眞理が含まれてゐる。

とは云へ、ナポレオンの非道德的の言動も幾分恕すべき點がないでもない。即

ち彼れの生活してゐた社會に於ては男尊女卑の風習が行はれてゐたからである。一體イタリア人やコルシカ人は、女子は弱者であるといふことを習慣的に信じてゐた。男子は所かまはずに烟草を喫む、不平を云ふ、惡戯を企らむ。然るに女子は人形の様に、或は奴僕の様、寧ろ概して後者として男子の斯の様な不行跡を黙視してゐた。ボスウエルは、彼れがコルシカに旅行した時、そこを出立するに際し、彼れの荷物を運びに來たコルシカ人が、其の妻を呼ぶのに、『ルドンヌ、ルドンヌ』(嬋々)といふのを聞いて面白く思つたと云つてゐる。此の風習はフランスでも大革命以前にはコルシカやイタリアと同様に存在してゐた。實際女子が自分達の權利を主張し出したのは大革命の時からであつた。然かし彼等の所謂婦人開放の運動方法は、冷靜思慮ある遣り方ではなく、寧ろ狂熱的であつた。であるからマダム・ド・スタエル、マダム・ローラン、シャロット・コルディの運動は、面白い、又同情すべきものであつたけれども、全局から見れば、彼等の熱狂は善い結果を齎さず、却つて有害な結果を招來したのであつた。即ち其の後と雖も女子は、男子が『自由』といふ恰好

な口實の下に、容易く不道德的な離婚を彼等に向つて敢て爲すことに對し、何等確乎たる保證も獲られなかつたし、且又ナポレオンをしてすらも、大革命中に彼の女等の爲せる婦人開放運動を痛烈に非難し、而して社會の安寧秩序の爲めには、女子を抑壓し、以て以前の慣習(男尊女卑)に戻さざるべからずとの口實を得せしむるに至つたからである。此の時代の婦人運動の歴史は尙研究する必要がある。何となれば此の婦人開放運動に於ける馬鹿な遣り方は社會の進歩に甚だ厄介な障害を齎らしたからである。ナポレオンは丁度此等開放運動者が、其の輕佻な行動によつて、古代ローマの理想を欽慕する復古思想を挑發した時に現はれた。吾人は後日ナポレオンの云つた次の様な痛烈な聲言に對して、幾分の贊意を表するに吝かなるものでない。『婦人は朕が宮中に於ては無勢力なるべし。彼等は朕に好意を有せざるべし。然れどもこれに依つて朕は宮廷の平和靜謐を保維することを得ん。』と。尙こゝに注意を要する不思議なことが残つてゐる。それはナポレオンの此の婦人運動に對する高壓的鎮靜策が、極く少數の頑固者を除いては完全

に成功し、婦人自らナポレオンの盲目的崇拜者に仲間入りしたことである。

要するに千七百九十三年より九十九年までの七年間に起つた出来事は、不思議に、豫望に充ちたナポレオンの希望と抱負とを打枯らしたのである。即ち先づ第一にコルシカの事件、次にフランス革命中の不遇、第三に妻ジ・セフィンの素行、これらが彼れを失望せしめた所の最なるものである。思へ、それは何を意味するか。故郷、政治的信條、妻、それがあるべきものたらざる状態を示したのではないか。蓋し大抵人間は幻滅に逢ふと、其の感情が鈍り、行動が麻痺する。而かもそれは根柢的であつて、意志の麻痺から來るのである。然るにナポレオンは周囲の不幸に向つて一層多くの精力を集中して、これを解決し遂にジュ・リウス・シーザー以後に於ける第一の大活動家となつた。このことは吾人のナポレオンの精力の偉大に對する感服を、より深からしむるものである。而かも彼れに向つて拂ふ吾人の感嘆は、これが總てではない。即ち八方から襲ひかゝる懊惱の生涯に於て、彼れは母レチチアに對しては子女中最善の子として、又兄弟達には最も親切な兄弟の一人として、其の態度を維持した。

ナポレオンは母レチチアには、最深の愛慕の情を捧げた。彼れは母を『立派な婦人』と云つた。そして彼れが未だ少壯士官であつた時、加増される度に金をレチチアに送つて、彼の女と家族を裕福に生活させる様に心を盡した。而して彼れが愈々第一統領となるや、レチチアに『國母』の稱號を贈り、且彼の女に告げるに、それに相當する態度を維持せんことを以てした。此の點に關して、ナポレオンとレチチアとは意見を異にしてゐた。ナポレオンの所謂『立派な婦人』レチチアは、決して此の統領政治、後に至つては帝政の光榮が永續するだらうとは信じなかつた。そして彼の女は一生懸命に金を蓄めることに努力した。彼の女が蠟燭や牛酪の様な瑣細なものに就いてまでも注意して、家政に緻密であつた話が澤山にある。ナポレオンが母の節儉振りに苦狀を云ふと、いつもレチチアは年寄らしく、『何時か若しお前達が、子供の時の様に、復た私の手に養はれる時が來たなら、お前は私の今やつてゐることに感謝するだらう』と云ふのを常とした。此の言葉は能くレチチアの

用心深い性質を示してゐるが、當時ナポレオンにはどうしても、それが解からなかつた。然かり、運り合せはレチチアの豫想通りになつた。即ち彼の女の古臭い節儉は、ナポレオンの死後永くボナパルトの一家を扶養したのであつた。斯の様にレチチアとナポレオンとは臘燭やバターに關する意見は異つてゐたが、母は彼れに負けてはゐず、常に彼れの上に其の身を持つることを忘れなかつた。家族が集つてカルタなぞをしてゐる時、ナポレオンが嘘を云ふといつでもレチチアは敢然これに抗ひ、少しも假借しなかつた。此の様な場合に彼の女は「ナポレオン、お前は嘘を云ふ。」と云つて叱り付けるのであつた。これに對してナポレオンが遣り直しをしたか、どうか、それを知るは興味深い事である。

ナポレオンの兄弟妹に向つての言行は、一樣には云ひ盡せない程多様であつて、南ヨーロッパ人の特質である機嫌更や、斑氣を以て色々に變つてゐた。由來ボナパルトの一族は誰れでも皆利口な性質で痴鈍なものなかつたことは確かである。ナポレオンの兄弟八人に向つて、自然は潑刺たる想像力、權力に對する熱烈な

る慾求、性慾及び辛辣なる辯舌を賦與した。第二子ナポレオンの天才に依つてボナパルト家が貧困の位置から遽に光榮の絶頂まで登つたことは、全く俄狂言の凡ゆる恰好な材料を供給するものである。世界は前世紀以來未だにボナパルト一族の企てた密謀や争闘、或は艶事、謀反等の爲めに泣いたり笑つたりすることを止めない。概觀するにジ・セフとナポレオンと其の弟のルイは此の『疑獄醜聞學校』の出身としては秀才であつた。若し此の有力な兄弟(ナポレオン)が、他の兄弟を酷どく叱り飛ばす様なことがあつても、彼等は大概なことは黙つて受けなければならなかつた。彼等は何事につけてもナポレオンの御蔭を蒙つてゐたからである。けれども兄のジ・セフと弟のルイ^註の二人を除いた他の兄弟達は、屢、ナポレオンに對して忘恩的の言動を敢てした。一番年下のカロリーヌとジ・ロームは、ナポレオンのイタリアとドイツに於ける勢力の崩壞に對して、或る程度の責任を免かれず譯にはゆかない。而して其の他のものもポリーリヌの外は、皆ナポレオンの重大なる危機に際して、彼れの意志を妨げることをして快しとした位の連中であつ

た。然かし長兄ジョセフは眞に従順温厚な好人物で、彼れがマドリッドに於て擧げられた地位の如きは、到底其の資性と相容るべき處のものではなかつた。實際ナポレオンは所謂身最良であつて、彼れの兄弟を猛鷲としようとしたのであつたが、何ぞ計らん彼等は資質凡庸にして只聞閥を恃みて傲歩し、或は得意に欣び鳴くの外、何の考もない普通の家鶏としかなり得なかつた。ナポレオンが兄弟の無能に焦慮煩悶したことは、其の對内政策と外交方針の兩者に重大な影響を及ぼした。家族と皇帝の希望とは絶えず相背馳した。それ故吾人は、マコーレーがチャールズ一世に就いて云つた箴言を茲に借用して、若しナポレオンが兄弟に對し、一層情愛なき兄であり弟であつたならば、あれ以上の良い統治者になつたであらうと云ひ得る。千八百年ナポレオンはメッテルニヒに向つて次の如き悲しい言葉を述べてゐる。曰く『余の兄弟親戚は、自分が彼等を立身出世させた恩惠の量よりも、より多く余に害悪を及ぼしてゐる。若し今から遣り直すことが出来るならば、余は彼等に、バリーに於て唯一つの宮殿と、彼等が無駄に消費する二三百萬フランの

金の外、一物も與へない。彼等の領土は美術と施物することである。王國などは彼等の支配すべきものではない。彼等の或る者は王國を如何に統御すべきかと云ふことを知らず、又或者はそれを爲し得る如く装つて余を煩はせる』と。

註 ルイは野望もなく、眞面目であつて、良くオランダを統治した。

然かしナポレオンは妹達には、極めて寛大な態度を以て臨んだ。それにも拘はらずエリザとカロリーヌの二人の如きは終には甚だ醜惡な忘恩的行爲と叛逆とを以てこれに報いた。これに引換へボーリーヌの兄に向つての態度は遙かに善良であつた。彼の女は王冠や金錢などでナポレオンを苦しめようとはしなかつた。或時彼の女は云つた。『妾は王冠の如きは念頭に置かない。若し妾がそれを望んだならば必ず得たであらうが、その嗜好を兄弟や親族に残して置いた。』と。美の神ヴァーナスはボーリーヌの守護神であつた。ローマのボルギースの別邸にあるイタリアの名彫刻家カノーヴァの製作したボーリーヌの肖像は十分に彼

の女の肉感的の美を想起せしむるに足るものである。ともあれ彼の女は善い妹であつて、ナポレオンのエルバに流されるや、母レチチアと共に彼れに従つて其の地に赴いた。

要するにナポレオンの兄弟や妹達に向つての態度は、頗る賞讃に値するものと斷言することが出来る。蓋し一の王統を創設した偉大な帝王で、未だ曾つて一人としてナポレオンが兄弟親族に盡した程、其の近親を優遇したものはない。此等の新帝王は一般に親族を無理矢理に隠居させるか、でなければ幽閉したものであつた。然るにナポレオンは母、兄弟、妹達或は伯叔父まで、光榮ある高位置に引上げたのである。又既に凋落期に足を踏み込んだ君主政治の壽命を延ばした彼れは、更に自ら範を垂れて、大革命中ジヤコベン黨の放縱に依つて破壊された家族制度を強固なものとすることに努めた。

ボナバルト一族の諍は、其の慍悍な性質から來たものであつた。けれどもナポレオンの兄弟の中で、長兄ジョゼフと妹のポーリーヌは穩かな型違ひの性質を持

つてゐた。そして此の二人に缺けてゐた烈しい性質は、ナポレオンや其の他の兄弟が人一倍持つてゐたことに依つて補はれてゐた。何事にも徒黨を作ると云ふ性癖は、イタリア人の特性である。夫のゲルフ黨とギベライン黨とが長い間イタリア全半島を鮮血を以て彩色した不可解な証争は、黨派心に富んだイタリア人にあらずして、何もの能くなし得る所であらうか。此の性癖は克く次の如きイタリア人の性行の中に見出される。即ち彼れはアリストはタッソーよりも優秀な詩人であるといふ自分の主張を貫徹させる爲めに十四度決闘をした。然るに彼れが愈、死ぬに際して告白したことに、彼れは未だ嘗て、兩人の作を一行も讀んだことがないと云ふのであつた。而して吾人は若し此のイタリア人がボナバルト家の縁者であるといふことを知るとも、別段不思議とは思はない。なぜなればボナバルトの一族はどんな問題に對しても黨派根性が甚だ烈しかつたからである。ナポレオンに親近して、彼れを研究した樞密顧問ペーレーは、慍悍と詐謀はナポレオンの最も著しき特性であると云つてゐる。

けれども、自分は彼れの性格の中には詐謀性よりは寧ろ慍悍性の遙かに多量に存在したのを認めるものである。それは實際ナポレオンが不正手段や或は詐欺瞞着に頼つた場合は幾度もある。千八百八年の春、彼れがイスパニアの皇室に向つて執つた政策は、フロレンスのメディチ家に適はしい狡猾な陰謀の一例である。又千八百十四年春、彼れが失脚した最後の因由は、自からコーレンタールに口授した命令書の通達を阻止したことに存するが、この一事は其の時シャチヨンに於て進行中の講和會議に對して、ナポレオンが誠意を持たなかつたことを立證したものである。ナポレオンは斯の様な行爲は毫も恥づべきものでないと考へた。彼れは勝利を獲るには手段を擇ばなかつた。或る時彼れは昂然として『予は如何なる時にライオンの皮を狐の皮と着更ふべきかを知つてゐる。』と云つたことがある。

然かしナポレオンは大體に於て明かにライオンの役目を演ずべく自ら選擇した。若し彼れが精力と威力とを用ふるのを加減したならば、彼れの猫の如き穩か

な舉姿によつて、大概餌食が獲れる筈であつた。然るに彼れの敵が直ぐに感知してしまつた通り、其の獍猛性は屢、彼れに活躍を命じたのである。そして此の性質は敵の勢力が増せば増す程、それに伴れて増加して行つた。即ちこれが彼れの弱點であつた。彼れの精力は決して節制や常識で制遏されなかつた。エチプト遠征中ナポレオンは亂暴にもシリアに屯營する小部隊を二分して、一はユーフラテス河流域より印度に派遣してアジアを攻略し、他の一部はコンスタンチノーブルに向はせ、而してヨーロッパを背面より取らうと云ふことを發表した。そして又彼れの没落の端緒となつた千八百八年のイスパニア干涉中にも、彼は次の様に書いてゐる。『朕はイスパニアに入つてヘルクレスの柱(ジブラルター海峡)を見出すことは出来るが、朕の力の頂上を見ることは多分不可能である。朕が軍事に携はつて以來、未だに此のイスパニアの暴徒や軍隊の様な怯懦なものを見たことがない。』と。ナポレオンが此の文を書いたのは二萬二千のフランス兵がバイレンで殆ど同数のイスパニア軍に降服した報知が、手許にとゞく少し前のことであつた。

馬鹿氣た自慢に對する痛烈な反駁ではある。

けれども此の傲慢にして躁急な性質は、大概の場合には異常に強固な意志の下に制御されてゐた。ブローニエ附近の口碑は今でも其の例を傳へてゐる。千八百四年の七月、ナポレオンはイギリスに侵入する準備の爲めにブローニエに滞在してゐた。或朝彼れは突然フロティラの觀船式を舉行すると云ひ出した。然かし司令長官のブルーエ提督は丁度此の朝、やがて来る暴風雨の兆候を認め、而かも彼れは沖に繋つてゐるフロティラ隊の安全に關して責任があるので、若し觀船式を舉行中、暴風雨が來てフロティラを破損するやうなことがあつてはならないから、天候の模様で觀船式を行ふことが出來ないとナポレオンに申告した。これを聽くや否やナポレオンは直ちに馬を飛ばせて提督の司令部へと馳せ付けた。彼れの眼は此の豫期しない抗命の爲め激怒に燃え立つてゐた。ブルーエはいくら暴風雨が催してゐることを彼れに信じさせようと努めても結局其の努力は無駄であつた。皇帝は答へて、『結果が如何ならうと、事は朕に關する。而して朕に關

するのみで卿に關することではない。直に命に従へ。』と云つた。これに對して復た『陛下、臣は如何にするとも仰せに従ふことは出來ませぬ。』と云ふ答が斷乎として返つて來た。これを聽くとナポレオンは一層酷く怒つて、ヅカヅカ進み出で、持つてゐた鞭を擧げてブルーエを殴り付けようとした。然かし何者にも怯まざる提督は劍の束に手を掛けて、『陛下、御注意召されよ。』と怒號した。數秒の間二人は唯相手を睨みつけるばかりであつたが、やがてナポレオンは鞭を降し、ブルーエは劍把から手を離して別れ去つた。此の行き懸り上副提督のマゴンが觀船式を司つて行つたが、其の結果幾十人かが溺死した。

ナポレオンがもう一つ、痼癩を意志の力で一層完全に制遏したことがある。それは千八百十二年のロシア戦争初頭のことであつたが、ナポレオンはウイルナに在るロシア軍の後衛を奇襲しようと企て、有名な騎兵大將モンブリュンに、其の率ゐる軍團を進め、敵の武器庫を奪取すべきことを命じた。然しながら軍規の上から見ればモンブリュンの騎兵軍團に降る命令は、騎兵總司令官ミューラーより來ら

ねばならぬ所のものであつた。故にミ・ラーはモンブリオン軍團の進撃を見て、大に怒り却つてモンブリオンに退却の命令を下した。モンブリオンは乃ちミ・ラーに事情を説明したけれども、彼れは軍規を楯に取つて動かす他の騎兵隊に進撃させた爲めウイルナに於て手に入るべき獲物を得ずしまつた。ナポレオンはモンブリオンの退却を大變に憤り、ミ・ラーの面前でモンブリオンを烈しく叱責した。モンブリオンは不本意に思つてミ・ラーに眼で、ナポレオンに事情を辯明してくれるやうに訴へたが、ナポレオンの所謂『善き奮闘者』なるミ・ラーもナポレオンの面前では、羊の如き沈黙を守るのみであつた。そこで終にナポレオンの叱責に我慢し切れなくなつたモンブリオンは劍を抜いて、それを頭上高く振り廻し、『貴方がたは二人とも何と云ふひどい方々だらう』と大聲に嗚りながら馳せ去つて了つた。ナポレオンは怒つて言葉も無く立つて居た。然し幕僚連が事の重大に恟々として心配したのにも拘らず、彼れはモンブリオンの不都合を何うともせず、彼れ自らもやがて馬を返して去つた。歸途にミ・ラーは事情を詳しく説明

したので、ミ・ラーもモンブリオンもそれ以上咎責を蒙ることがなかつた。

此等二つの事實はナポレオンの強固な意志が、其の激烈な癪癢を制御する力を持つてゐたことを表示する適例である。此の様に、如何に激烈な憤怒の中に陥るとも、智力と意志を以て、それを制御することを忘れないが此所にナポレオンの深怒の眞に恐るべき點が存する。まさかの時に、能く憤怒を制御し、それを政策の遂行に役立たせ得る人物は、ロシアのポール一世の如く、怒ると一時殆ど野獸のやうになる人達よりも恐ろしい。千八百三年三月十三日英佛國交斷絶の折、チャイルリー宮で英國大使ホイットウ・イス公に對して演ぜられたあの有名な一幕に於ても、ナポレオンは決して自制を失つてはゐなかつた。世に喧傳されるやうに、彼れは事實イギリス大使を擲つたのではない。又擲らうとすらもしなかつたのだ。彼れは議論の後始末をポルトガル公使に依頼した程であつた。

ナポレオンは大抵の場合、激情を制御し得たけれども、これは全く唯努力によつてであつた。如何となれば天性、彼れは性急であつたから、本質的には激情をコン

トロールすることは出来なかつたのである。彼れの活氣に充ちた精力は、事物に對して爲す簡單なる評論、筋肉痙攣、急に眉を曇らせる聲、或は侍臣秘書等に手紙の文句を口授するに當り、部屋の中を彼方此方歩き廻ること、又は冬ストロブにあたる時腰を掛けようとしないうで立つた儘踵で丸太を蹴る習慣等の諸點に現はれてゐる。然かし彼れが性急なものにも拘らず、其の劃策性に富める頭腦の鋭敏な直覺と、強大な意志の制御力とは、凡べての計畫或は處理に關して、獨特な強い能力を、彼れに賦與したのであつた。

性格を知るに必要な色々の事實を、斯く斷片的に敘述するに當り、論者は特異な點は誇張して説きながら、平凡な事は注意せず、に漏らしてしまふことがあり勝ちなものがある。それは扱て置き、吾人は大體に於て、ナポレオンの態度が元氣で氣取らない所謂天真爛漫で、快活であるが、輕卒に失せず威嚴があつたことを見落してはならない。巨人ロシア帝アレクサンドル一世や、プロシア王フレデリック・ウイ

リアム三世を威壓したあの短少な容姿の中には、然かせしむる或ものが潜在してゐたのであつた。然しながらナポレオンはフレンドシップを許してゐる彼等アレクサンドル一世及びフレデリック・ウイリアム三世の面前では、暗示的な、そして犀利な觀察は、新しい先見を示し、或は極く平凡な話題を清新化した。概して打解けて裕やかな親みを見せたのであつた。而してこれなぞが彼等を威服した點であつたらう。千八百八年エルフルトで、アレクサンドルと會商した折なぞ、ロシア皇帝の催した華麗な舞踏會は、可成りに人の注意を呼んだものであつたが、それでも尙大衆の注目の中心をなしたものは、此の矮小なコルシカ人が老詩人ウィーランドに對して爲したタシタスの功罪論であつた。ナポレオンは能く政治上の復雜極る事件を裁斷すると共に、一方では精力を思想方面に注ぎ、ゲーテとも會見し、此の思想王國の君主を魅了した。斯く形而上及び形而下の精力が併び具はり且克く聯著したものは、近世史上彼れに及ぶものはない。如何となればフレデリック大王の如きも、文學や美術の獎勵はしたが、それをナポレオンの此れら廣汎な

る部門に關する生氣潑刺たる趣味に比較する時は、如何にも誇張的であり、又態とらしくも見える。ナポレオンが斯く諸英雄に比して優越の地歩を占めたことは、實に主として其の天賦の才能と驚くべき記憶力が多端の生涯を通じて利用し得た所の、彼れの少壯時代の異常なる勉學に因るものである。

又ナポレオンは生活の戦闘に對し、十分に裝甲してゐた。彼れは事物を冷靜に而して明瞭に考察し、得たる材料を頭腦の異なつた部分へ種類別けをして仕舞込み、そしてそれが入用の時には、彼れの精力と才智を以てそれを引き出し、適時に役立つのであつた。セント・ヘレナでグールゴイに彼れは云つた。「朕が採用した優秀な手法は、數學の知識と、凡ゆるものに對する明識とに負うてゐる。予の記憶力は不思議である。青年時代には三十組乃至四十組の對數を知つてゐた。尙朕はフランス全國の聯隊の士官の姓名を知つてゐた計りでなく、彼等は何處から募られて來たかといふことも承知してゐた。且如何にすれば彼等を鼓舞奮起せしめ得るかも心得てゐた。」と。これは唯徒らにする自負の言葉ではなかつた。ナ

ポレオンの記憶力は實際驚く可きものがあつた。千八百五年九月、彼れはブローニニ、からパリーへ歸る途中、某軍の一部隊が本隊の何方にあるかを確め得られないで迷つてゐるのに出逢つた。其の時彼れは同部隊の隸屬する聯隊の番號を尋ねたが、其の聯隊がブローニニ附近の北海々岸から出發した日を計算して、其の進路と今正に其の在るべき所を指示したのであつた。彼れは斯く驚くべき記憶力を有してゐたばかりでなく、物事に對して非常に熱心であつた。第三講で述べるであらうが、彼れが若し知らざるべからざる所のものを知らなかつたとしても、彼れはそれを知らざるを苦にする馬鹿臭い氣弱から、又は大風な自負的態度から質疑を躊躇することはなかつた。即ちナポレオンが成功した主要條件は、彼れに關係ある總べての事物に向ひ、徹底的に熾烈な精神を注ぐことに存した。要するに彼れの身體のうちには天才の焰が燃えてゐた。これは分析すること出来なければ、書き現すことも出来ないものであるが、將官も兵卒も皆其の魅力に酔はされてゐた。ナポレオンが未だあまり出世しない中に、革命政府の役人達

は此の少壯な戦士を制御しようとしたが却つて總べてのものを支配する彼れの偉大な力の把握の中に、彼等自身を見出す様な始末となつた。如何にして彼等がナポレオンの掌中にまるめ込まれたかは、彼等自身知らなかつたが、しかし一人一人彼れに籠絡されて了つたのである。これから考へるに所謂動物磁氣は、恐らく非常に澤山な活力の流出と見らるべき天才に、必然的に附随するものであらう。この動物磁氣を持たないものは、大勢の混亂した時に際しては、どうしても勢力を維持することが困難である。而して此の性能を有するものは、補導し得べき民衆を統制することが出来るのである。老ビットは鮮かな魅力を持つてゐた。この片影は彼れの子即ち小ビットに於ても認むることが出来る。ラファイエットは全然この性能を持たなかつたが、ミラボウには十分に賦與されてゐた。ダントンの性格中にも、時々此の魅力ある動物磁氣が強い力で躍動するのが見られた。ダントンがあのように失敗したのは全くこの性能が缺けてゐた爲めではなく、彼れ自身の無頓着からであつた。吾人はミラボウ、ダントン、及びボナパルトが具有した此

等磁氣的性能を十分に査定する時、フランスの運命をよく説述し得るものである。吾人は今や偉大なコルシカ人が、能く他を魅了し、征服し、而して制御し得た諸性質の或る一部を観察し終つた。ナポレオンはあらゆる點に於て其の競争者よりも立ち優つてゐた。而して彼れの偉業が競争者のそれに比して甚しく卓越してゐる如く、彼れ自らに於ても、相手を凌ぐこと遙かに遠きものがあつた。チャタム伯老ビットの辯舌に存する魅力の一つは、最高潮に達した雄辯の力にすら勝る。其の解釋することを得ない彼れの人格の中に存したと云はれてゐる。それと同様に吾人は、ナポレオンが内に於ては内閣の一室に執務し、出でては能く戰場を馳驅し、而かも單に一個の明敏なる外交家、鑑識性に富んだ立法者、常勝の武人、大皇帝に止まらないで、人としての總べての點に於て甚だしく優越してゐたものであると論斷し得るものである。

第二講 ジャコベン

眞に軍隊を指揮し得る人物は、卿の首領である。而して彼れは國民議會の首長にして、又全共和政治の首領でもある。ペーテ、フランス革命回想録

政治界に於ける革命は、物質界に地震が齎らすと同様の結果を將來する。即ち其の衝動は舊來の秩序や準規を破壊し、而して又個人階級、或は國民を甚だ驚くべき遣り口で動搖させる。然かし革命は其の當座假令大きな損害を拂ふにしても、結果に於ては新しい又力強い精力を創成する。殊に國家は此の様な耐へ難き經驗に出逢ふと、往々従前よりも強大な勢力を具備するに至ることがある。否革命の程度にまで達しない内亂ですら、ギリシア或は中世イタリアの歴史に現はれる様に、國民をして自由の氣溢れ、偉大にして到底想像を許さざる力を具備せしめる。

イギリスもクロムウェルが出たシヴィルウォア以前は決してあれ程強盛ではなかつた。而してフランスは千七百九十年二月にピットが豫言した通り、無政府状態を呈した大革命の混雑紛亂の境地から急激な歩調で秩序を回復し、遂にヨーロッパ列強中、最高の地位に到達するに至つた。然かし國勢を回復する第一條件として、フランスはフランスのクロムウェルを見出さなければならなかつた。幸なる哉同國はイギリスのクロムウェルよりも一層偉大なクロムウェルを見付け出した。

蓋し一見不可能の様に見えたナポレオンとフランスの聯結を齎らしたものはフランス大革命である。ナポレオンは大體大革命の爲めに、フランスの拘束よりコルシカを解放せんとしたバオリよりも一層大なるものとして歴史にその名を現はしたのである。更に想像を推し擴げて見るに、確かにコルシカはナポレオンの絶大な精力に取つては範圍が餘りに狭小であつた。而してイタリア革命の計畫或は東方征定計畫等は、共にフランスの爲めの頻りに彼れの大膽な想像と、勁烈

なる性質に、其の解決を訴へた。とは言へアンシャンレチームの下に於けるフランスの利益を擁護せんとするナポレオンを想像することは困難である。彼れは假令ブリエンヌやパリイで教育を受け、且フランスの軍隊に奉職したとは云へ、千七百九十年までは衷心フランス人ではなかつたからである。

彼れのノートブックは能く此の間の消息を證明してゐる。千七百八十七年十一月にパリイで書いた一つの手記——コルシカに就いて書かうとした著述の緒言とも見るべき——に於て、ナポレオンは同胞(コルシカ人)に、彼等は彼等のみが其の缺點を知る一大君主國の國民であることを忘れざるやう訴へてゐる。彼れは更に附言して云ふ、而して恐らく彼等は此の政治上の害惡を滅除すべき治療手段を、唯世紀の進路に於てのみ見出すであらうと。實際ナポレオンの少壯時代の勉學は、殆どコルシカをフランスの束縛から脱離させようとする希望に基いてなされたと云つても大なる間違はない。吾人が前講で述べた如く、ナポレオンの性質は時代の思想に對して非常に敏感であつた。波瀾重疊たる其の生涯に於て終

に浮世の荒波に打ち勝つた彼れの強硬な、而して實際的の性質は未だ彼れの易感性を蔽ひ隠す様なことはなかつた。彼れは故郷を愛した。小説や音楽或は詩は彼れの心臓を躍らせた。短い感動的な冒険談も書いた。彼れの文章は恰も火山から噴出する熔岩のやうに熱烈であつて、良心に對する訴、道徳に對する慾求を以て沸騰してゐた。彼れは千七百九十一年に書いた『リヨンの話』に於て次の如く叫んだ。『あゝルソー、なぜ御身は唯僅に六十年しか生きられなかつたのだ。『徳』の爲めに御身は不朽であるべきであつた。さりながら一步を譲つて若し御身が唯かの『村の豫言者』の一本をのみ著したと假定しても、それはそれ單獨でも既に立派に御身と同様の思想を懐いてゐる人々に甚大の貢獻をしたに違ひないし、又それは、易感性を有する多くの人々によつて、記念碑を建設される價値は十分にあつたであらう。』と。他にも此の種の思想を表現した彼れの文章の幾つかを引證することが出来る。ナポレオンが斯の様な文章を書くに際しては其の當時、矜の紅潮が雙頬に現はれた。然かし十年の後此れらの文が彼れに關係して引用される

や、それとは非常に違つた迷惑氣な様子が彼れの顔に見られた。然かしそれは兎に角としてナポレオンには可愛らしい點がある。と云ふのは彼れは恰もルソーの門弟となつたかの様に、ルソーの心を心から遵奉したからである。吾人はナポレオンが其の黄金時代に於てすらも、其の幸福はヴァレンスやアウソンヌ在勤中、家根裏の部屋で獻身的熱情から『徳』の爲めに絶叫した時に優つてゐたかどうかを疑ふものである。

後年ゲーテを感奮させて『若きエルテルの悩み』を書かせたルソーは又、社會改造の猛烈な計畫に向つてジャコマン黨員を驅り立てた人である。當時個人も社會も頗る變則であつた。絹の手袋に下には鐵の拳骨が潜んでゐた。桃色のセンチメンタリズムは、切烈に生を慾求する百姓一揆の耀きの中に消えて行つた。疲れ果てた心を新らしくしようとして、ルソーの理想の說に赴いた人々の多くは、其の政治的福音の熱狂者となつた。ナポレオンも其の一人である。否彼れはスウィス及びコルシカの代表として此の思想を奉戴したのであつた。ジ・ネー

ヴの哲人(ルソー)の偉大な感化力は説明するまでもない。彼れの傑作である『社會契約論』は、幼稚な當時のデモクラシーの福音であつた。それは當時宗教的信念の虧損してゐたフランス人を眞剣に刺戟したのであつた。ルソーは叫んだ。『法は唯人民の意志を源泉としてのみ生ずる。(フランスがコルシカに臨んだ様に) 征服や買収によつて獲られた條約や權利は、人民が頼つて以て初めて人民たり得る所の根本的契約の力によつて無効となるものである』と。彼れは更に云ふ。『文明は人間を頽廢せしめる。汝等は唯自然の本性と、原則的の公道に於てのみ、個人と國家を完全に支配し得る制規を見出すであらう。』と。『黄金時代に返れ』と彼れは絶叫した。此の絶叫は彼れの若き崇拜者(ナポレオン)をして、英雄的な壯嚴な過去を回想せしめ、墮落せる現世に非常な憤慨を感じさせたのであつた。

ルースタンといふジ・ネーヴの一牧師が、ルソーが『社會契約論』(第四卷第八章)に於て、キリスト教を攻撃したのを反駁したのに對し、ナポレオンは更に千七百八十六年に書いた理窟つばい處女論文で、ルソーに代つてルースタンに挑戦し

てゐる。ルソーは民衆の總意の全活動範圍を證明しようとして、キリスト教は民衆總意の力を毀損するものと云つた。以下はルソーの言葉である。『キリストは精神的の宗教を地上に建てようとして生れた。然しながらそれは修道者を政治組織より分離し、國家の統一を破壊し、國內に分派を生ぜしめ、常にキリスト教國民を煽動し、永久に動搖せしめるものである。』此の點がナポレオンの非常に力強く、ルソーの主張を支持した所であつた。ローマカトリック教は國家の統一を破ると、彼れ自身亦絶叫した。曰く、『ローマカトリック教、此の宗教によつて國家の統一が亂されることを證明する確實な證據がある。』と。ナポレオンの此の言葉は、後に至つて彼れが『民衆總意』を代表するものなりと稱し、ローマカトリック教會を自分の意志に服従させようと努力したことから考へて意味深いものがある。然かし勿論ナポレオンの此の青年的論文の大部分は、革新教會を辯護したルースタンの議論を論じ返した所のものであつた。

ナポレオンは餘り深く論旨を進めず、唯獨斷的にルソーの定説を繰り返す

ことに彼れ自身を満足させた。ナポレオンの論ずる處によれば、キリスト教徒は常に來世といふことにのみ想を馳せてゐる。であるから彼等は現世に於ける富の分布の不平均から生ずる貧困や、或は社會道德の不完全な結果起る不正義な事柄等に關しては、多く注意を拂はない。されば若し國家がこの貧困や不道德を排絶しようとして、社會の均衡を平直にしようとする、とキリスト教徒は此の問題はそんなに大問題ではないと主張する。といふのは彼等は未來に於ける神の裁を希つて、神は此の移ろひ易い現世の不正を矯め直してくれるだらうと思ふからである。非公民的な此の冷淡な態度が問題なのだ、とナポレオンは云つてゐる。彼れは更に、キリスト教徒は現世に無關係である。故に彼等は公民としての資格がない、と云ふ。もう一步進めて彼れは、キリスト教が國家から離れた特別な或るものを形作り、以て國民の忠節を破り、甚しきに至つては、政府に向つて叛旗を翻させることすらあることを酷く非難し、又云ふには、『實際キリスト教は民衆を幸福ならしむべく努める。然かし一方政府も同様に國民の幸福を計る。而かも此れら

兩者の手段は相互に衝突するものである。』と。而して今や吾人は現代の或る傾向に於て彼れの豫想の正鵠に當りしことを容認しなければならぬ。如何となれば現在國家は、以前専ら教會が管轄支配してゐた國民生活の——物質的方面は勿論であるが——精神的方面をも支配しようとしてゐる。教育事業などは其の最も著しい例である。斯う云ふわけでナポレオンの豫言は頗る注目し値するものである。然かしながら此の論には、大體に於て、それを眞面目に受け容れる必要がない程、焦思と狂熱の思想が多く表現され、特に『キリスト教は國家の統一融合を破壊する。如何となれば、それはジエスイット教の僧侶團の如きものを作るからである。』と云ふ主張を以て、新教牧師を壓迫せんとする努力が見られる。

最後の神の裁を心に待つて現世のあらゆる不義非道を忍耐するかと思へば、不屈の片意地を以て政府に對し或は悪い意味で冷淡な態度を持し、政府が人民の爲めにする有益な仕事を兎や角妨害する非現世的なキリスト教徒に關し、ナポレオンが如何にその概念を構成したかといふことを知るは興味ある問題である。蓋

し白い外衣を着け星を凝視して空想に趨る學徒以外には、歴史は未だ嘗て斯の如き存在に直面したことはない。そして歴史は新教徒がこれと大に類を異にせる素材より構成されてゐることを知る。茲に注意すべきは此の論文は彼れが十七歳の時(千七百八十六年)に作つたもので、當時ヴァレンスに勤務し前に出た自殺論を書いたのも同じ頃であつたことである。ナポレオンがこれを書いた所のヴァレンスは、セヴンヌ山脈に程遠からぬ所にある。由來此の山脈地方は非現世的の夢想者ならぬ、實際的な大思想家の出た所である。然かし此の論旨の傾向は、ナポレオンが従來ルソーのものばかり多く讀んで、それに釣り合ふべく歴史を讀まなかつたといふ事實に強く支配されてゐる。

兎に角此の少年らしい論文は、國家は民衆總意の體現であらねばならぬとする、彼れの覺悟を維持すべく運命づけられた、精神上の特色を示してゐる。斯の理由から行けばナポレオンはジャコマン黨員である。而かもフランス革命の始まる三年前から、彼れは立派な革命主義者である。大革命の進行に際し、ジャコマン黨

員は次第々々にルソーの理想を擧揚することが強くなつて行つた。ルソーの學說に於ける信條は、フランス(ジャコマン治下)をして社會の治安を索むべく焦慮せしめた。フランスは此の理想を實現する爲めに、隣國のオウストリアだのプロシアだのに宣戰して砲火を開いたが、社會の安寧を得る所か、却つて非常な紛亂を惹き起して了つた。これが爲め、千七百九十三年の末までに大勢は甚しく專制政治に傾いて行つた。然かし此の專制政治は、ルソーが民衆の自由を保護する最後の手段として、肝要なものなりと云つた所のものであつたのである。未だ嘗つて一哲學者が一大軍人を、これ程までに恵んだことは一度もなかつた。一種の磁力がルソーをコルシカに牽付け、其のルソーにコルシカ生れのナポレオンが結び付いたのである。而してフランス革命が其の聯絡を完結し、そこから無限の勢力の閃耀、ナポレオン帝國が現はれた。

ナポレオンが大革命初期の出來事に就いて、どんな見解を持つてゐたかを知ら

うとしても、それは無益の努力に過ぎない。それは此れに關する文書が残存してゐないからである。ナポレオンは大革命の勃發した時には、ソーヌ河畔の一小塞オウソンヌの兵營に勤務してゐた。オウソンヌの町は甚だつまらない町である。ナポレオンは當時健康が餘り優れなかつたばかりでなく、非常に貧乏してゐたので肉食を廢してゐたといふ話がある。但しこれは風説であつて、彼れの第一次オウソンヌ駐在中千七百八十八年乃至翌八十九年九月外面に現はれた事件は、水泳中痙攣が起つて危く溺死しようとしたこと、バスチーユ獄が革命暴徒に奪取せられたことが全國に知れ渡つた爲め、各地に暴動が蜂起し、其の一つがオウソンヌ附近のサールの町に起つたので、これを鎮壓すべく出掛けたこと位に過ぎない。此のサールの暴動は極く小さいものであつたが、これに對するナポレオンの態度は注目に値するものがあつた。彼れは斷乎たる意志を以て行動した。部下に銃へ彈藥を裝填すべく命じ、そして大聲に叫んで云つた。「善良なる民衆は凡べて家に歸らしめよ。吾等は唯不逞の暴徒に向つてのみ發火すべし。」と。彼れは斯う

して自由と放縱との間に一線を劃したのである。ナポレオンは友愛の情を、無賴漢や掠奪者には與へなかつた。彼等には彈丸と刀鎗といふのが、彼れの主張であつた。當時局にある人達が皆これと同様な意見で事を處理したならば、恐らくフランスをして一時的とは云へ、あの様な無政府の状態に沈淪せしめず、に濟んだであらう。

彼れが此の重大な時機に於ける、フランスの状態に關して述べた唯一の論文がある。それは千七百八十九年五月五日ネッケルが立法院に提出した財政状態の報告書を、彼れが深甚な注意を以て詳細に論じた概論である。ネッケルの報告書によれば、當年政府の財政状態は五千六百萬フランの缺損を生じ、其の額は前年缺損高の殆ど三倍に達するものであつた。彼れは此の論文に於てネッケルが提案した經濟政策を全般に互つて詳細に評論し、之れに加へて、コルシカ及び邊境の兩三州から代議士の出でゐないことをも述べてゐる。それから三月の後、コルシカに歸省中、彼れは又「パリで募集した利率四分五厘の國債は全く失敗であつた」と

附説した。而して吾人はナポレオンの書いた此等の記録、或は千七百八十九年八月コルシカに歸ることを切望した點等からして、彼れはフランスが危局に陥つた時こそ、故國コルシカを獨立させる機會であると考へたものと斷言し得るのである。實際バリーに於ける經濟機關の破壊は、アヤッシオに自由を齎らすべきであつたからである。

千七百八十九年九月から九十一年二月に亙る長い賜暇の間にナポレオンがコルシカに於て、故國の爲めに盡した努力を縷述するのは餘りに繁雜に堪へない。然かし其の中著しいものを擧げて見れば次の如くである。彼れがアヤッシオに到着するや、直ちに同市にデモクラチクなクラブを作る計畫をなすと共に、更に國防軍をすら組織しようとして企てた。然かしこれら二つの企ては同島駐在のフランス政府の代官の爲めに禁遏されて了つたが、ナポレオンは此の高壓手段に向つて異議を申立て、尙目的の貫徹を期すべく島廳所在のバスチアの町に赴き、官吏を説得して其の許を得たので、アヤッシオに於て再び國防軍を組織することが出来

ることゝなつた。斯く擴大したナポレオンの活動は、ブルボン家の權威の事實地に墜ちたフランスに對するよりも、寧ろコルシカに取り残されたブルボン家の代官目宛のものに他ならなかつた。フランスの國民議會は此の時、從來フランス本國がコルシカに對して保持して來た關係を改變した。フランスとコルシカとは從來征服者と被征服者の關係であつた。それが改めて同等の位置に立つやうになり、コルシカ獨立運動に盡瘁してブルボン王朝に睨まれ、外國に逃げてゐた亡命者も歸ることを許されるに至つた。バオリも其の中の一人であつた。コルシカはフランスの一デバルトマンとなり、千七百九十年の初めに制定されたデバルトメンタルシステムの特權を享受することゝなつたのである。此れはコルシカ人の豫期しなかつた恩典であつた。ナポレオンの如きですら僅か四年前までは、コルシカが獨立を贏ち獲るには幾世紀かを待たねばなるまいと考へた位であつた。それが今や名義上のみならず事實獨立の恩典を受けたのである。彼れが歡喜と感謝にをのゝき、而してバオリの親英的態度を不快に思つたのも不思議ではある

まい。長いイギリス生活はバオリに、古い彼れの崇拜者だつたナポレオンとは甚だ違つた見解を賦與せずには置かなかつた。強烈な性質で主我的な二人の間の不和は到底避くべからざるものであつたのである。コルシカ研究者のボスウ・ルは、バオリには猜疑の癖向が有つたと云つてゐる。而して現在コルシカの獨立を邪魔したものととして、又フランスの爲めに追ひ立てられ永らく外國に流浪した老人としてのパリオに見れば、フランス・クラブや國防軍の創設者で三色の帽章を見よがしに著けた、年少血氣のナポレオンを、墻壁無しに見ることは出来なかつたのは道理である。斯くしてバオリとナポレオンとの疎隔は漸次擴大して行き、ナポレオンはフランス人とアヤッシオ市の青年間に勢力あるデモクラテック黨の牛耳を執り、内地の住民はバオリの肩を持ち、兩々相對峙して下らなかつたのである。

千七百九十一年二月にナポレオンは再びオウソンヌの聯隊に軍務を執るべくフランスに歸つた。彼れはオウソンヌに赴くのに、道をローム河谷に取つてそれ

を邁つたが、其の時後に大僧正となつた叔父のフラスニエへの手紙に次の如く書いた。

セルヴ 千七百九十一年二月八日

小生只今貧困者の陋屋に宿泊致居候。當方に於て勇敢の人々との會談後、臺下に拙書拜呈仕候事、小生の欣快不過之候。(中略)何地に於ても、農民共確かなる心組相抱き居候如く被存候。殊にドーフィネ州に於て然る様見受申候。人民達皆々憲法制定を命に懸け候ても、相違度存念に御座候様被存候。ヴァランスにては心堅固の人民、國を愛することいと深き兵卒、及び專制貴族的なる士官等見掛申候。(中略)通常善良なる社會と申さるゝものゝ四分の三は、貴族的專制政治家共、我物顔に立振舞ふ所に御座候。而かも彼等はイギリス憲法政治の禮讀者の假面を被れる輩に他ならず候。

此の手紙によつて、吾人はナポレオンが所謂第三階級の意向を、非常に考慮しつゝあつたのを知ることが出来る。

此れと同様な手法をバオリも亦よく用ひた。然かし此の様な遣り方は、ナポレオンの性に合つたものではなかつた。ナポレオンと老英雄(バオリ)との不和が表向になつたのは、ナポレオンのブッタフォコ伯爵へ宛てた熱烈な書翰に、バオリが冷笑を浴せ、且ナポレオンがコルシカの歴史を書かうとして、それに非常に必要な記録の提供をバオリに求めたのに、歴史などは年若いものゝ書く可きものではないと云つて、すげなくも其の懇請を拒絶した時からであつた。此の温味のない返答は、今までコルシカに注いでゐたナポレオンの熱情を冷却したものであつて、以後彼れの態度は全く一變し、コルシカへの熱情を次第にフランスに注ぐに至つたのである。

ナポレオンがオウソンスで貧しい生活を送つてゐた時、リヨンの學士會院が『人々を幸福ならしむるには、如何なる思想を最も多く訓ふべきか』といふ懸賞論文を

欠

欠

る皮肉であつた。これと同様に彼れは公證人が徹臭い羊皮紙のみに頼つて、これら社會に存する不公正の問題を決定して了ふのを罵つてゐる。これはナポレオンの現行法律の不完全に向つての皮肉であつた。斯の様にナポレオンは社會の慣習や制度の不公正不完全を攻撃したが、財産制度に對しては攻撃の手を伸ばさなかつた。彼れは富める者には罵詈を放たずして、却つて社會制度の他の一面に於て、自由保有不動産所有者、工匠、又は小商人等が、この制度によつて幸福な生活を送る権利のあることを主張した。此の論文でナポレオンの人生哲學と『力』に關しての觀念が判明する。彼れは富の分配の不公平は認めてゐたが、敢て富める者に挑戦するのではなかつた。唯貧しき者をして假令少量なりと雖も、快樂を確實に享受し得る地位にまで向上させようと思つたのである。教育に就てはナポレオンは幾何學と史學の重要なことを力説した。彼れは史學を『精神科學の根本、眞理の導燈、偏見の矯正者』と呼び、附言して幾何學と史學は、未來に於ける理想的國家の統治者をして、其の論理を完全ならしむると共に、民衆をして眞理の探求に

向はしむべしと云つてゐる。

ルイ十六世がドイツ國境に遁竄せんとして失敗してから間もなく、ナポレオンが『共和か專制か』なる問題を捉へて書いた、短いながら興味ある感想文を次に掲げよう。それは全譯する價值のあるものである。

久しい以前から、予は趣味として、政治上の事實に興味を持つてゐる。従前公正な政論家が共和政治が可か、專制君主政治が可か、其の撰擇に就いて疑問を抱いたとしても、今や其の疑は解消して然るべきことと思ふ。共和主義者は侮辱され、誹謗され、脅迫される。而して政敵は唯一つの理由として、共和政治はフランスには不可能なる旨を主張する。事實專制君主々義擁護の論客は却つて君主制倒壞の爲めに多大の努力を傾注した。如何となれば彼等は無益に解剖的吟味の辭を縷述し、結論として常に共和政治は其の事不可能なるが故に不可能なりとの言を吐く。予は專制君主々義者の云つた總べての

演説文を讀破したが、それに於て彼等が價値なき理由を支持するに大なる努力を盡してゐることを知つた。彼等は何の取り止めも無く主張するが、それを實行に移したことがない。されば實際予が、彼等の演説速記を讀んで、それに異議を挿んだならば、彼等の主張を直ちに消散せしめたであらう。彼等は云ふ、『二千五百萬の人民は、一個の共和政體の下に、存在することを許されない。道徳的資性を有たずして、共和政治を組織することは不可能である。一大國民は統合の中心を持たねばならぬ。二千五百萬の人民が一共和政體に隸屬することは出来ない。』と。これは甚だ不手際な言説である。云々。

感想文はこゝに終つてゐる。而して此の文の殊に注意すべきは、これを書いてから六年後、イタリア遠征が終末を告げた時(千七百九十七年)に、彼れは以前罵倒した君主々義者の主張を得々として引用したことである。ナポレオンはメルジとメオに云つた、『何が理想だ。人口三千萬の共和國。而かも現今のフランスの社

會狀態に於て、フランス人の様に缺點だらけでどうしてそれが出来るか、全くそれは現在のフランス人が完全無缺の人間だといふ迷想からだ。だが然かし、その迷想も、他の凡べてのものと同様に無果消え去るだらう。」と。此の如き彼れの思想の完全なる轉倒を説明しようとするのが本講に於ける自分の眼目である。

第一に吾人は彼れの民主的信念は狭少な經驗と、人生の局部的な研究から發してゐることに氣が付く。さればやがて彼れは一時彼れの理性を満足させ、空想を燃え上らせたルーソーの學說の中に、矛盾の混在してゐるのを、其の正確で熱烈な性質によつて看破するに至つた。一體ルーソーの均齊的思想と其の獨斷哲學とは、妙にラテン民族の共鳴を得たもので、それはアングロサクソン人には到底理解出来ない所である。ラテン民族は、ルーソーのセンチメンダリズムに酔つた計りでなく、又一方定義から公理となり、公理から既に命題となつた政治幾何學にも喜んで耳を傾けた。それは既に外觀上からでは幾何學に於けるユウクリッドの定理の有する立派な確實性と同様なものを體得した所のものであつた。されば改

説者ナポレオンが決算の爲め帳簿を締切つた時、斯く叫ぶことが出来た。「これこそ爲すべき所のもの」と。此の政治幾何學は抽象的問題ではなかつた。而かもそれはルーソーが非常に確信して企てた政治組織上の問題であつた。そして此の研究者ナポレオンが均齊主義から出發して實在の世界に目を移すに到るまでと云ふものは、政治幾何學の效果は實に大したものであつた。

吾人の更に注意しなければならぬのは、ルーソーが『社會契約論』を書いたのは、スイスの一州にあてはめる見界から書いたもので、フランスの如き大國にあてはめようとしたのではなかつたといふことである。であるからルーソーも特に彼れの理想とする共和政治は、フランスの如き大國に於ては實現は不可能であると述べてゐる。然るにフランスのジャコベン黨員は、此のルーソーの學說を、一國王によつて統一され、戦争で擴大した一大國家、封建制度に基礎を置く社會組織に應用しようとして執拗な努力を注いだのである。これは該論の主唱者ルーソーに對しては勿論、常識に對しても亦恕すべからざる大罪を犯かしたものであつ

た。ナポレオンは此の妄誕な大失錯——それはロベスピエールやサンジースト自身及び彼等が完全ならしめんと夢想した國家(フランス)に取つても致命的であつた大失錯——には幸にして毫も關與してゐなかつた。ナポレオンがルーソーの學說を研究するに當つては、常に彼れの郷土(コルシカ)を頭に置いた。このコルシカこそルーソーが自ら作つた理想的法律を適用するにふさはしい所と言明した島である。然しながらコルシカ自らはルーソーの民主々義を拒んで容れなかつた。ナポレオンはコルシカに於ての最後の賜暇中、フランスの爲め大いに奮闘した。然かしコルシカ人は君主々義指導者としてのパオリに味方したので、ポナバルト一家はフランス本土に向つて逃げ出さねばならなかつた。(千七百九十三年六月)

ナポレオンの出世には、實際此の年の賜暇程都合の好いものはなかつた。マッソン氏は、ナポレオンは九月の虐殺前にパリを離れてゐたと云つてゐるが、自分も此の考察には賛成である。またルイ十六世の死刑や其れに附隨して起つた諸

事變の際にも、確かに彼れはパリに居なかつたし、恐嚇時代の初期には、南フランスに滞在してゐた。されば彼れは多くの將軍連や、『勝利の組成者』カルノー自身が鮮血に塗れた中に、獨り汚れない手を以て一枚役者となるに至つた。斯かる事情でコルシカ人の伍長(ナポレオン)は恐嚇時代の暴虐の響を遠くに聞くのみであつた。然かしそれらの暴虐は彼れの心の中に、眞の愛國者が感ずると同様それを憎む感情を發生させずには置かなかつた。内亂はいつのそれも國民的感情を鈍らせるものである。吾人はその後ナポレオンがフランスの民主々義に對して、絶對の信任を抱いてゐたかどうか疑はしく思ふ。彼れがプロヴァンス州に赴任した時は確かにジャコベン黨に左袒してゐた。然かし此の選擇は、必要と信念から來たものであつた。といふのは第一に、彼れに甚しい變説がなかつたならば、プロヴァンスに於て自分がコルシカで擁護したと同様の事由(フランス共和政府の擁護)に反對するなどといふ氣には到底なれなかつたらうし、第二に、此の時主權を握つてゐたジャコベン黨が、四方から來襲する外敵を防ぐ爲めに、偉らい精力で國防

軍を組織しつゝあつたからであつた。愛國的衝動否な自己保存の意識は、フランス人に侵寇者を驅逐すべく、十分に彼等に命令し得る力を有つ政府は、如何なる政府にせよそれを支持すべく命じた。千七百九十三年六月二日に、ジロンド黨がパリで覆滅したことは變態であつたが、然かし彼等を滅して勝利の榮冠を頂いたジャコベン黨は、其の能力に於て遙かにジロンド黨に優れてゐることを示した。『共和政治の周圍に集合せよ。一體となりて分裂する勿れ。』これは彼等の喊聲であつた。『勤王主義者ブルボン黨員聯邦論者、或はフランスの戰鬥力を毀損するものに對しては、容赦することなし。』此等の叫びはルーソーの崇拜者たる、奇驕の言を快しとせざる常識家たるを問はず、フランス全國民の腦裡に共鳴を起した。外國侵入軍を驅攘すること、不平黨を撃滅すること、は、彼等の爲すべき義務の中、最も明白にして最先のものであつたのである。

此れが千七百九十三年八月初旬頃にナポレオンが書いたパンフレット「ボーケールの晚餐」の主眼である。此の本は彼れがボーケールの町か或は其の近所で書

いたものらしい。梗概は大體彼れが其の町か又はアヴィニオンで會つた勤王主義同情者との實際的な對話を以て表はされてゐる。ナポレオンは「一將校」の口を借りて、勤王主義の二人のマルセーユ商人に、彼等の目的は完備するジャコベン黨の兵力の爲に失敗すべきことを戒告する。カン、^註リヨン、ボルドー、グルノーブル、或はアヴィニオン等に起つた暴動は壊滅した。沿海諸州の人々は、ジャコベン黨の新憲法を受容しなければならぬ。富裕なマルセーユは、春の夜の夢の様に淡い王朝の復興を想つて、其の存在を危ふくすべきではない。マルセーユ商人の一人は此の論を駁し、且全プロヴァンス州は、容す可からざる暗殺者ジャコベン黨に對して起つべしと主張する。而して更に曰く「マルセーユは王政を翹望するラヴァンデーとは異なる。マルセーユは眞正の共和政體を得んことを希望してゐる。さればマルセーユはブルボン家の百合の花の下に戦ふのではなく、三色旗の下に戦ふのである。」と。ナポレオンはこれに答へて云ふ。「前年バオリはコルシカに於て、三色旗を翻へした。然かしこれは唯島民を欺く爲めに過ぎなかつた。

されば事實はやがて彼れの真相を示した。而してどんな辯解の言葉をマルセーユが発表したにせよ、現共和政府を承認しないならば、事實マルセーユは、ジャコベン黨政府の承認を肯ぜざるイスパニア或はオーストリアの爲めに戦ふものだ。同席のニームの市民とモンペリエーの工業者も亦、一層手ひどく其の事實を攻撃する。曰く『マルセーユ市民がどんなに自身を辯護するも、彼等は結局フランスの敵である。』と。これに應じて痛烈なる返答は直ちに來た。『ジャコベン黨は暗殺と惨禍とを敢てする罪人だ。故にマルセーユは彼等の存在を是認するよりも寧ろイスパニアの艦隊を招致するものである。』と。此の言葉に接するやナポレオンは激昂した。彼れはマルセーユ市民を戒めて云ふ。『其の様な同胞に對する反逆的行動は、マルセーユに破廉恥の醜名を負はせるものだ。而して若しマルセーユ市民が其の様な反逆罪を敢て犯したならば、一週日を出ずして六萬の愛國者は一撃を彼等の頭上に加へるだらう。それでも彼等は冒せる失策がどんなに大きいかを認めないでゐられるだらうか。彼等は少數の賣國奴が彼等の首に課した

鞭を破棄しようとするのか。そして共和の爲めにマルセーユを奪回しようと思はないのか。』——『君等は欺かれてゐる。少數の陰謀家や反逆者に欺かれるのは、人民に取つては敢て珍らしいことではない。從來民衆の純朴と淺慮とは、多く内亂の原因となつた。……マルセーユは常に自由の中心であるべきだ。其の名を以て、自由の歴史の數ページを占むべきである。』と彼れは強調した。

註 此の事に就ては必然リヨン市に於ける共和主義者の成功に言及せねばならぬ。然かし同市は十月九日までは降伏して居らぬ。アヴィニオンは七月二十六日に降伏し、ナポレオンは同月二十九日にボーケールに入つた。そしてイギリスのフッド提督が、ツィロンを占領したのは八月二十八日であつた。此等の事實は、ナポレオンが、此の小冊子を書いた時日を決定するものである。

興味ある彼れのパンフレットはこれで終つてゐる。其の語調はジャコベン黨員と云ふよりも、寧ろオポチュニストと云ふべきである。ナポレオンに取つては國家の統一に協賛する衝動が、如何なる政治上の言説よりも大きな力を持つて

ゐた。彼れは、此のパンフレットに於けるマルセーユの市民を、確かに良實なる共和主義者の資格あるものと認めるも、其の行動は善良な愛國者の敢てせざる所としてゐる。彼れのマルセーユ商人に對する譴責の語句は、ニームの市民やモンペリエーの工業者程苛烈ではない。即ち是れによつて吾人は、ナポレオンが國內の亂闘に對して超然としてゐて、出來得べくんば、此の騒亂を平和的手段で解決しようとする希望を有つてゐたことを知ることが出來得るではないか。全體として此のパンフレットは立派な作品であつて、其の對話も十分に生きてゐる。そして其の結論はフランスの愛國者及び進歩主義者の一般に賛意を表し得る所のものである。

フランスの一畫家は此の事件(ボーケールの晩餐)を捉へて巧みに其の情景を畫いてゐる。強烈なサイドライトに照らされた、裝飾も何もない粗末なボーケール町の旅館の一室で、一人の將校と二人の商人、一市民と一工業者が、熱心に時局の大問題を議論してゐる。四人の人達は食卓の周圍に坐り、他の一端に傲然と直立し

た瘦せ形の一中尉を凝視してゐる。彼れの瘦せて血色の勝れない顔貌は、共和政治に反抗し、其の敵を援助する罪を詳細に絮説する熱情に、紅潮を呈してゐる。世才に長じたらしい二人のマルセーユ商人は、自分達がした所業の結果、やがて明かに遭遇すべき滅亡の非運を豫想するかの様に、呆然後ろに寄り掛つてゐる。一方ニームの市民とモンペリエーの工業者とは、此の剛毅な同志を驚異と讚嘆との態度で見上げてゐる。此の畫は當時全フランス國民に漲溢してゐた自己保全の本性を適切に表示するナポレオンの思想の、活きた體現である。

年少士官(ナポレオン)の先見は偶然にも的中した。即ちマルセーユのジャコモン黨員はカルトール將軍の軍に援助されて、程なく國民議會の權威を回復し、而して英西の聯合艦隊が、同市を占領しようとして圖つた機先を制して了つた。然かし一方ツィロンでは、溫和黨と勤王黨が八月二十八日にイギリスの提督フィードを招いて要塞を固めた。時局は斯くして展開し、ナポレオンを表面へ拉し來つた。周知の通り、彼れは共和軍の砲兵を指揮すべく急遽呼び出された。然かしツィロン奪還

後、彼れは別にジャコベン黨と一緒になつて、無辜の民をギッチースで殺す、あの残忍なる仕事には携はらず、それらはフレイロン始め國民議會の分子に委せて關係しなかつた。それから間もなく千七百九十四年二月六日に、彼れはブリガディール・ジェネラルに任ぜられ、當時司令部をニースに置いたイタリア遠征軍の砲兵を指揮すべく命ぜられた。

此の任務は彼れと小ロベスピエールとを懇意な間柄とした。彼れ(ロベスピエール)はサリセテと共にナポレオンの此の度の昇進を斡旋したのであつた。ナポレオンと小ロベスピエールとの交際は可成り深厚なものがあつて、殊にオーギュステン・ロベスピエール(小ロベスピエール)の方では、ナポレオンの才能に就いて非常に感服してゐたらしい。其の證據には、千七百九十四年四月五日、彼れが兄(ロベスピエール)に宛てた手翰に、多くの愛國的行動を採つた將校中、殊にナポレオンを殊勳者なりと指名してゐる。然かし彼れはそれに附加して次の様に妙なことを云つてゐる。『彼れ(ナポレオン)はコルシカ人である。而かも唯彼れはバオリの寵

遇を拒絶し、此の賣國奴(バオリ)の爲めに財産を掠奪された人民の一人であるといふ保證を呈示するに過ぎない』と。此の言葉の下に猜疑のアンダートーンが聞かれる。コルシカ人は反逆好きの人民と目され、而かも小ロベスピエールは自身ナポレオンの少しも掴まへ所のないのを克く知つてゐたからである。然かしながら『猜疑』は恐怖時代には生活のあらゆる方面に浸潤してゐたから、これも敢へて異とするに足らないかも知れない。此の二人の間に於て、兩者の言動が共にジャコベン黨員のそれである内は、友人關係が存續し得るのであつた。此の時ナポレオンが何處まで小ロベスピエールに親近したか、に就ては、吾人は餘り能く知らない。だがナポレオンは彼れがテルミドールの變に失脚して死刑に處せられたのを聞いた時、『自分は彼れの破滅に多少の感慨を懷かないものでもない。何故ならば予は彼れを好み、而して彼れを純潔な人物と見てゐたからだ。然かし若し彼れが予の父であつても、専制政治を希望したならば余は彼れを殺したであらう。』と云つた言葉から彼れの小ロベスピエールに對する心持が窺はれる。

ロベスピエールの妹はニースでナポレオンを見て、彼れは共和主義者たるのみならず、兄の信實な黨人モンタニヤール(ジャコベン黨員)であると云ひ、又「最も廣汎な意味での自由の黨人、而して最も眞正な意味に於ける平等の味方」と讚めた。ナポレオンが第一統領在任中、三千六百フランの年金を彼の女に與へたのは世人周知の事實である。此のことは併せてナポレオンの小ロベスピエールに對する同情の一般を證明するものである。然かしナポレオンが徹頭徹尾執政官、ロベスピエール(の忠實な追従者であつたかどうかは疑問である。而して自分は彼れの聰明は、ルソーの『社會契約論』の鑄型の中に、無理にフランスを嵌め込もうとする(ジャコベン黨)努力に反對であつたであらうと信するものである。

パリに於けるロベスピエール所刑(千七百九十四年七月二十七日)の後間もなくナポレオンの身邊にも大危険が襲つて來た。即ち彼れは偽善的叛逆人として、ロベスピエール黨の計策の立案者として、又戰略を敵へ漏洩した者として、而して過ぐる日ジノアに使した際に賣國的行爲があつたものとして、公に告訴された。

欠

欠

政府の陸軍卿から歩兵旅團長として西方軍(ラヴァンデー駐屯)に赴任すべく命ぜられた。これは彼れに取つて一大頓挫であつた。彼れは來るべきイタリア遠征軍に参加すべき希望を、以前から懷いてゐたのに、ラヴァンデーの森の中で褐色の梟(ブルボン)黨を征伐すべく命ぜられたのである。其の任務は彼れが心に染まなかつたばかりでなく、又資格權能からしても砲兵司令官より劣等のものであつた。然かしナポレオンは當時變轉甚しい政情の下で、やがて此の命令が更改されるのを豫期して、マルモン、ジュノー及びルイ・ボナパルトの三人を伴ひパリに向つて上つて行つた。

ナポレオンの精神が變化した當時の興味ある記録の主要なるものは不幸にしてジュノー夫人の書いたものである。フランス人の記録は概して興味の深いもの程虚偽が多い。而して此の未來のダブランテ公爵夫人の書いた記録は確かに其の興味に富んだものゝ一つである。兎に角彼の女はナポレオンが實際にパリに到着した時(千七百九十五年五月下旬)よりも九ヶ月以前、即ち前年の七月に彼

れがパリに來た様に書いてゐる。而かも事實は、ナポレオンの瘦せた身體つき、其の黄色の骨ばつた頬付、灰色のオーバーコート、の肩まで垂れ下つた蓬々とした頭髮等によつて、一層ひどく見えたダラシない態度等々を描出した彼の女の記録とは幾分異つてゐる。更に彼の女はナポレオンが手袋を、それは彼れが贅澤無用のものと考へて嵌めてゐなかつたこと、或は足に合はない大きな而かも靴墨を十分に塗らない靴を履いてゐたことまでを書き止めてゐる。常に彼の女の注意を惹付けた所のものは此等外觀上の事柄であつた。然かし又茲に全く本當かと思はれる様な逸話もある。此の時ジュノー夫人の母であるバルモン夫人が、ナポレオンに向つて、彼れをアンチープの牢獄に投じたのはサリセテであると云つたのに對し、ナポレオンは微笑しつゝ、『あゝサリセテは私を蹴落さうと思つたのだ。然かし私の運命は彼れが目的を達するのを妨げた。けれども私は自分の運命を誇つてはならない。なぜならば私の運命の如何に成り行くかを、誰れも豫知し得ないではないか』と云つたと傳へられてゐるのがそれである。尙其の他に彼の女の

書いた話がある。即ちブレリアール一日の變(千七百九十五年五月廿日)の夕刻ナポレオンが彼の女の母の家にやつて來て、中部フランスに放浪中、食物すら十分に得られなかつたから、手厚い待遇をして貰ひたいと申出でたこと、更に此の日ナポレオンは議會に行つてゐて、暴徒が代議士連を脅迫し、議長を保護しようとした一議員フェラウドの首を斬り落し、鎗の先に突き刺し、議長の面前に差出して脅嚇したが、此の有様を彼れは敘述して、『實際若し吾々が斯の如き暴行を以て、吾が革命を汚辱することを止めないならば、フランス人であると云ふことは取りも直さず其の人の不名譽を意味するに至るであらう。』と絶叫したといふことである。然かしジュノー夫人の記録には頗る氣の毒ではあるが、ナポレオンは此の悲劇的事件のあつた日にはパリから約百哩も離れたシャチーヨンにゐた。尤も彼れはそれから七八日後(五月二十七八日)にパリに到着して、この言葉を云つたかも知れない。なぜならば、此れは明かにナポレオンの群民政治に對する侮蔑の意を表現してゐるからである。

事實有識者は總べて、民衆中の無頼な分子を抑壓するの必要を痛切に感じてゐた。而して斯う云ふ時期はいづれの革命の経過に於ても來るものであるが、其の場合社會の秩序を回復するに十分な力のある強い嚮導者、自由を保維するに十分公平で偏依なき態度を取り得る嚮導者を見付け得た國が幸福なのである。

其の幸福な運命は古代ローマのそれでもなければ、近代のバリーのそれでもなかつた。ローマの市民はパンを得、彼等の獨特なサーカス、ゲームを觀覽することが出來たならば、政治上の自由などは餘り念頭に置かなかつた。であるからあのアウグスタスの嗣子チベリウスなども、人民には努めて此れら二つのものを與へることにし、凶年に際してすらもこれを缺かさなかつた。フランスの統治者として、ナポレオンも亦同様に不景氣の際は人民に働くことを求め、そして窮困に不平を抱く彼等の憂懼を搾り取つたのである。ナポレオンは人民の單純な政治上の不満は、決してそれを重視しなかつた。ナポレオンの運命は、彼れ自身を秩序の力が勝利を得た時バリーに連れて來た。此の時バリーは——此の都に於ては以前

幾度ならず見た状態ではあるが——甚しい風紀頹廢の状態に陥つてゐた。大歡樂境は、革命と反動の兩者を招來するに好適な場所である。少數者の華麗な豪華振り、多數の貧乏人との對照は、他の何處に於けるよりも速に多くの人々の不平を醸成する。而して若し事件が千七百八十九年の様に遂に爆發した時は、富に依存する種々の職業の滅亡は遅かれ早かれ一の反動を促がす。千七百八十九年乃至九十五年の事件(フランス大革命)は、千八百四十八年乃至翌四十九年の事變(二月革命)或は千八百七十年乃至翌七十一年の事變(普佛戰爭)の時と同様に、非常の秋、バリーに起つた反動傾向の威力の大なるを立證した。千八百四十八年乃至四十九年に、二月革命の影響を受けて起つたウインナの革命騒動と同様、こゝバリーに於ても、此の革命運動は殆ど自働的に反動と制遏とを伴つた。歡樂の都は其處に位置する政府に、有害不安定の影響を與へる。

自由の星が水星(水)辯舌(火)星(金星)戀愛(金星)の前に光を失ひつゝある時、ナポレオンはバリーに來た。そして彼れは直ぐそれらの魅力に惹き付けられて了つた。千

七百九十五年七月ナポレオンは華やかな文章で娯樂と華奢の増進して行く有様を説述してゐる。曰く「奢侈遊興、或は藝術は驚くべき有様で回復しつつある。歴史、化學、植物學、天文學に關する圖書館は、續々として設けられる。人心を他に轉向させ或は生活を愉快にする様凡べてのものは集積される。人々は思想を引抜かれて了ふ。そして此の心的作用と社交的渦流の暗黒面の探究をなすにはどんな方法があるだらうか。婦人は何處へ行つても居る。競技場、劇場、運動場、圖書館、何處へ行つてもゐる。學者の研究室に於ても美人と出會ふ。……どんな婦人もパリに來て、何が彼の女に適してゐるか、何所で自分の腕が振へるかを知るには、僅か六ヶ月経てば十分である。」

斯くしてナポレオンは藝術の中心、社交生活の中心、ジャコメン黨員を町の片隅の貧民窟に逐ひ込んだジャーネズドレー(右翼の青年)の都市パリに對する獻身者となつた。政治問題に關する、彼れの主要な要求は、革命で破壊された社會の秩序を回復すると共に、勤王黨に向つてはガッチリした手腕を有し、而して外國との

戰爭をば光榮ある結果にまで齎らし得ることの出来る、強力な政府の樹立にあつた。このことはナポレオンが、イスパニアとの媾和締結(千七百九十五年七月二十二日)の後、オーストリア、サルディニア聯合軍の防禦を撃破すべく、三萬の軍をピレネー山地からマリタイムアルプス地方(イタリア國境)に移動する計畫を、畫策した因由を説明する。彼れがラヴァンデーの歩兵司令官に任ぜられたのにも拘らず、それに赴任しないで、賜暇の日限が切れてもパリに止まつてゐた内面の原因も、こゝに存する。斯の様な我儘な態度は遂に彼れを將官の地位から追ひ落すまでに至つた。然かし彼れの運命は此の失策——若しこれが失策であつたならば——を補填した。即ち千七百九十五年十月五日(ヴァンデミエール十三日)のパリに於ける暴徒の蜂起は、彼れに出世の機會を與へた。此の暴動は王黨が起さずとも必然爆發すべきものであつた。そしてナポレオンは此の運動を叩きつぶすべく、フランス國民議會に味方をして起つたのであつた。

茲に最初ナポレオンが議會の味方にならうか、或は暴徒に味方しようかといふ

ことに迷つた事實があるとの説がある。然かし自分にはナポレオンが此の事に就いて一瞬たりとも躊躇したものは信ぜられない。何故なら是れより以前の彼れの書翰は、彼れが新憲法に對して多大の期待を懐いてゐたのを示してゐるからである。彼れは、ジャコベン黨の政府の如き亂暴なものでなく、さりとて優柔ならず、機を見て北イタリアからオーストリアの勢力を一掃し得る、敏活強大の政府の樹立されるのを希望してゐた。市民権が縮少したり、或は幾多の復古的變化の來ることなどは、彼れに取つては一顧にも値しないことであつた。新制度即ち總裁政府は強力有爲である様見受けられた。彼れにはそれが總べてゞあつたのである。

其の後イタリア遠征は革命以來強大となつた市民の感情を放出しようとするナポレオンの目的を貫徹させた。此の戦争の開始される砌なした、彼れの宣言に於て、従前部下を呼ぶに名譽の稱呼として用ひた『市民』の語を廢めて『兵士』なる言葉を使用した。而して將卒の士氣を鼓舞するに用ひた刺戟劑は、『自由の領域の擴

張』でなく、光榮の豫望と戦利品とであつた。事實、彼れがイタリアに攻め入つて間もない五月に、彼れのイタリア人に向つて告知した所は、フランス軍がイタリアに來たのは、彼等を鐵鎖から解放せん爲めであるといふにあつた。然るにこれと同時に彼れは又總裁政府に『吾々は此の國から朝貢金として二千萬フランを徵集する豫算である。當國は世界に於ける富國の一である。然かし現在に於ては過去五年間に互る戦争の爲めに甚しく疲弊してゐる。』といふ手紙を送つてゐる。而かも彼れは、イタリア人を甚だ侮蔑した言葉を漏らしてゐる。否其の上彼れの軍旗の下に馳せ参じたイタリアの志願兵にすら、同様輕侮の態度を以て臨んだ。此の戦争の末期に、ヴェニスを裏切る事件(ナポレオン)が起つた。其の口實はフランス軍の徵發の結果ヴェネチア共和國のヴェロナに暴動が起つたからと云ふのにあつた。周知の通りナポレオンは詐術を以て、無抵抗裡にフランス軍をヴェニスに侵入せしめ、其の艦船と武器庫とを手に收めたのである。千七百九十七年五月二十六日、彼れはヴェネチアの新民主政府に向つて、自分は全精力を傾注して同

國の自由を確保し、且イタリアを再び世界の自由獨立國の班に列せしむべく努力する旨を誓つた。然るにこれと同時に彼れはヴェニス市(ヴェネチア共和國の首府)と同國の東半部とをハブスブルグ家オーストリア皇室に讓渡した。そして此の無法極まる行動を彼れは總裁政府に致した次の如き言葉に於て辯解してゐる。「蒙昧怯懦にして解放の資格なく、而かも領土なく海上權を有せざる人民は、當然吾人が土地を讓渡せる國民即ちオーストリアに委任すべきである。吾人は彼等(ヴェネチア人)の船舶を悉く收得し、兵器庫を占領し、總べての大砲を奪取し、銀行を破壊し、而してコルフ及びアンコナを吾等に留保せんと欲する。」と。

註 革命曆第四年(リムール末)千七百九十七年十二月二十日までにナポレオンはイタリアより、三千九百四十萬八千フランを徵收した。

アンコナ及びコルフなる語は取りも直さず東方を指す導標である。ナポレオンの意中には次に取るべき大計畫が潜在してゐたのであつた。吾人はやゝもす

れば彼れの大偉業の光彩の爲めに、眩惑され易い。彼れの偉業は其の概念と實績に於て吾人にアレクサンダー大王と、リチャード一世(Coeur de Lion)とを想ひ出させる。然かしメダルには裏面がある。エジプトの占領は従來フランスと良好の關係にあつたトルコに對する、謂のない侵略であつた。故にそれは征服と膨脹の循環を開始したものであつた。フランス革命の根本主義はイタリア遠征で其の輝きを失ひ、東方遠征(千七百九十八年—九十九年)に到つて全然没却されて終つたのである。戦争は東方遠征に於て最も野蠻な外形を取つて現はれた。叛亂を起す處がある人民を畏嚇する爲めに、反徒の首級を袋へ填めてカイロに運び、目抜の場所でそれを明けたことや、或はヤッファの海岸で二千五百のトルコの捕虜を平然虐殺したが如き事件は、フランスの軍隊と指揮官(ナポレオン)とを畜生道に墮落させたものである。「東方」は毎に其の侵入者の上に微妙な力を作用する。マシュー・アーノルドは其の高雅な詩によつて「東方」の沈黙的不可抗力を詠つてゐる。

『東方』は狂風には低く頭を垂れる、

我慢強い、深い侮蔑の裡に、

彼の女は敵軍を雷奔させる、

而して其れに應へて、彼等を思索の淵に投込む、

捉へられた『東方』は、捉へた己惚れ占領者を屢克服した。即ちアゼンスの民主政治の凋落は、小アジアに於ける戦争から始まり、ローマもそれと同様な原因から同様の失敗に出逢つてゐる。而してフランスの民主政治も、既に千七百九十七年——九十八年のイタリアとスウィスとの掠奪で基礎を危くされてゐたが、遂にエチプトとシリアに於ける半野蠻の遊牧民族との戦闘に依つて、回復の望無きまでに歪められて了つた。假令如何なる共和國でも、一度東方の宗教的熱狂者を統治しようとしたならば、或る範圍までは、其の習俗を利用しないわけには行かない。

而して斯かる東方遠征に従事した武將政治家、或は將士は、必然の結果として多少に拘らず反民権的の蕪雜な職業的觀念を吸収することになる。二十年前フランス軍がワシントンの軍に對して爲した接觸は、彼等の中に革命思想を注入する一助となつたが、今マメリュークとトルコ人とに對する戦争は、フランスの將卒を、反動政治の道具とするに役立つのであつた。

吾人は今ナポレオンの十八歳(千七百八十七年)から三十歳(千七百九十九年)までの性格の進化を追究した。これに關して人々の常に陥り易い誤は、彼れの性格を固定した、而かも石の様に硬いものと見做すことである。確かに晩年の性質は其の通りであつた。然かし若い時は多情多感即ち易感性で殆ど流動體的とも云ふべきであつた。此の様な人物は得てどんなことにも手をつけて見たがるものだ。自分の知る所では只一つ彼れがしなかつたものがある。即ち詩ばかりは眞に一行も書かなかつたことだ。然かし彼れはルーソー崇拜に就いて情緒の全範圍

を涉獵した。其の爲めに激烈な政治的方面の競争に入る前に彼れは千七百九十年から此の方面に身を投じた。彼れの精神は疲勞する様な結果を呈した。其れから以後彼れはフランスの民主政治に心を傾けた。然かし先見の明と的確な判断とが彼れに命ずるに無謀に陥らざる様進退の保留を以てしたことは確かであると自分は信ずる。コルシカに民主政治を敷くべく失敗した彼れは、フランスに於てそれに奉仕せんとした。然かし恐嚇時代に當り彼れはロベスピエールの甚しく夢幻的な理想、或はそれを實行する爲めに採られた血生臭い手段のいづれにも同情した形跡はない。彼れは當時ジャコベン黨に加盟はしてゐたが、それは恐嚇主義者としてではなく、勇敢なフランス國民統一の主張者としてであつた。

とは云へ此の恐ろしい騒動は其の影響をナポレオンに與へずには置かなかつた。彼れもコルシカ人であるので幼少の頃から血腥い場面に慣らされてゐた。然かし千七百九十四年ツィロンを初め各地方に行はれたギョチヌの大虐殺は、更に一層彼れを血に動ぜぬものとした。前講で述べた千七百九十四年春のコル

ディテンダに於ける亂暴な仕草は彼れが愛人に小さな戦闘の光景を見せよう爲めに、兵士數人の命を浪費したものであつた。後間もなく彼れは罪の無いのに獄に繋がれたので、必然パリー兒の政治に悪感を懐かねばならぬやうになつた。千七百九十五年頃は、彼れはパリーの歡樂に魅せられ、共和政治には餘り熱心でない高等遊民の様に見えた。然かし勤王黨を抑壓すると共に對外戦を果敢に實行し得る強い政府の爲めには、それが如何なるものであるとも喜んで戦に赴く心持はあつた。千七百九十五年の夏には、彼れは既にイタリア遠征の夢に酔つてゐた。而して彼れはそれを完全に實現した。さうすると今度は『東方』が彼れを手招いた。而して性格の方面から見た其の結果は、千七百九十九年彼れはシンシンナスならざる、一個のシーザーとして西方に歸つたのであつた。

千八百年の八月にナポレオンは第一統領として、ジェラルダン將軍と一緒にルソーが死ぬまで住んで居たオアーズのエルマンヴィユ村を訪れた。そしてルソーの住宅に赴き、其の臨終の部屋に入つた時、ナポレオンはジェラルダン

に、次の如き看過すべからざる言葉を吐いた。「ルーソーは馬鹿だ。吾々を現在の境地に陥れたのは彼れである。」ジ・ラルダンは答へた。「いや吾々はそんなに苦んでは居ません。」ナポレオンは其の時はそれ以上何も云はなかつた。然かしそれから附近のポプラル島にあるルーソーの墳墓に到るや、彼れはその習癖である強い語調で、思つてゐる所を明に開陳した。彼れはルーソーの墓石を見詰めながら云つた。「此の人が生れたかつか方がフランスの平和の爲めによかつた。『なぜさうですか、統領。』ジ・ラルダンは訊ねた『なぜならばフランス革命の下拵へをしたのは彼れだからだ。』然かし閣下、革命について兎や角云ふのは、閣下の爲めに取るべきことではないと思ひます。』ナポレオンは答へた。「それはさうだ。だが『未來』は世界の平和の爲めに、ルーソーが生れた方がよかつたか、或は予が生れた方がよかつたかを辨別するだらう」と。ジャコベン主義の死を弔ふ鐘聲である此等の言葉の中に、吾人はイムベリアリズム進軍喇叭の第一聲を聞く。

欠

欠

出掛けて行つた。フランス兵は皇帝が彈丸雨飛の裡に現はれたのを見て、打つて變つて士氣が旺盛となるのであつた。彼れはこれを見ると衷心よりの満足を顔に現した。殊に彼れは近衛兵——取り別け老年の——に向つて、軍隊に入つて何年になるか。何處で勤務したか。身體に幾つ傷があるかと、色々と訊ねて喜んだ。ナポレオンは彼等をフランス帝國初頭の逞兵と呼んだが、これは確かに彼等の不平を抑壓する最良の手段であつた。

ウエリントン將軍が、ナポレオンの戰場に現れるのは四萬の兵力を増加するに等しいと計量したのは尤もである。何故なら彼れは策動が巧妙であり、敵に加ふる打撃が苛烈であつたばかりでなく、其の戰場への出現は、將卒に全力を振はしむべく士氣を振興し、又勝利は必ず彼等の頭上に臻るといふ不拔の信念を抱かしむるからであつた。テエボーはフランス軍がカルニック・アルプスを越えて將にオーストリアに進入せんとする千七百九十七年の初め、最下級の兵卒でもウインナ入城の確信を語つてゐたと云つてゐる。彼等は將來それがどんなことに成り行

くか、そんなことは、少しも心配しなかつた。彼等にとつては既にナポレオンを頭に戴いてゐるといふことで十分であつた。此の一事は千七百九十六年から千八百十四年までの奇蹟を明瞭に説明するものである。此等の奇蹟は戰略家、戰術家、或は士氣鼓吹者として、卓越せる人物の力に基くものに他ならない。

千七百九十六年はフランスに取つては無二の好機であつた。第一次對佛同盟は早くも崩壊した。タスカニー、プロシヤ及びイスパニアはフランスと和し、殊にイスパニアの如きは今までの味方イギリスに向つて戦争を仕掛ける様な位置に立つ始末であつた。其の上過ぎし四回の戦争で蕪雜だつたフランス共和政府軍は精練されて、自ら勝利に到る道を開拓する様になつてゐた。「パンと鐵とにより、汝等は支那に到達すること可能なり。」とは年少士官等の兵卒に對する叫びであつた。戰勝か然らずばギョッチーヌは、フランス革命政府軍の將校に取つては二者其の一を擇ばざるべからざる所のものであつた。適者は生存し、不適者は滅亡する進化論の法則の峻嚴なる作用は、ダーウイン出現以前既にフランス軍の將卒を

して、此の有益な原理の證據たらしめた。人材は大抵何處の軍隊の中にも居る。然かし君主々義の同盟軍に於ては、此等人材も年長順や或は後宮的偏姑の爲めに、昇進することが出来なかつた。そして長い間不遇に泣いた後、漸く軍の首腦となるのであつた。然かし終には列強軍もフランスから授けられた嚴酷な教育によつて、それと殆ど同等の實力を得るに至つた。とは云へアーチデューク、チャールスの戰術上の堪能、ウエリントンの不撓の防禦力及びブリッヘルの執拗なる戰闘性を一身に併せ具へたナポレオンは、千八百十三年まで能く彼れの卓越振りを示して譲らざるものがあつた。

傑出せる統帥者の具備すべき資質の中、先づ第一に數ふべきは、明敏な洞察力と目的の不變とである。ナポレオンは此等貴重な性質を有することを、早くから證據立てた。千七百九十三年九月ツィロンの攻撃に於て、彼れは早くもマルグラヴィ要塞と呼ばれた、該港の内外兩方面を瞰制し得る高地にある、イギリス軍の砲臺の重要なことを觀て取つた。國民議會軍の軍事委員達は既に、英西兩國艦隊に破

裂丸を注ぐべく、戦略を決定してゐたことはわたが、此の攻撃の効果を完からしめるには、唯マルグラード要塞から攻撃を加へる外途はなかつた。此のことはツィロンの王黨も、寄手の共和軍も共に知つてゐた。であるから攻防戦の手初め、即ち千七百九十三年九月二十一日英西聯合軍は此の樞要な地點を占領し、砲臺を築き始めたのである。然かし聯合軍には老練な工學者が居なかつた爲めに、その砲臺は長時間に互る砲撃と最後の突撃を支持するには餘りに脆弱であつた。のみならず大部分イスパニア兵であつた其の守備兵はフランス軍の攻撃に頑強な抵抗を敢てしなかつたので、フランス軍がそれを占領するのは餘り困難な仕事ではなかつた。従つてナポレオンの名前が其の際フランス陸軍の首腦部の記憶に残らなかつたのは尤ものことであつた。然かし此のツィロンの攻圍戦は彼れの一つの問題に對する洞察力と、比類稀なる不屈の精力を明示したものであつた。

オーストリア軍をイタリアから驅逐すべく、千七百九十五年七月ナポレオンが劃策した計畫は、より一層見事なものであつた。それは間もなく説明する通り、翌

九十六年のイタリア遠征に於ける事件の經過を、其の儘正確に現はしたものであつた。而して此の計畫を自身實行する爲めに取つた彼れの不可撓な決心も亦、それに適はしかつた。ナポレオンは目的を達成すべく、賜暇の期限過ぐるも歸任せず、最も偉大な常勝將軍たらん爲め、フランス軍から放逐せらるゝの危険を敢て冒したのであつた。彼れは運命を試みることを怖れなかつた。而して遂に運命は、總べてを彼れに與へたのである。

剛毅な性質を有する人物の一つの特徴は、成功に必要な總べての事物を我がものにしようとする覺悟である。弱志乃至神經質の人間が知つた振りをする場合、剛毅堪能の人物は知つてゐる所を一層確實ならしめる。千七百九十五年十月四日(ヴァンデミエール十三日)彼れが内國軍司令官に任命された當初、彼れは軍隊生活の雑多な項目は勿論のこと、歩兵や騎兵に關しても餘り多く知らなかつた。そこで彼れは臆する所なく直ちに側近の者に向ひ必要な事項を質問した。テエボール將軍は其の時の有様を寫實的に書いてゐる。

余は今尙間に合せの前立(帽子)をぞんざいに着けた彼れの不恰好に小さい帽子、無造作に結んだ三色の飾帯、好い加減に切れた上衣、或は古來希れな彼れの運命を作り出した武器の一種とは、どうしても受け取れない劍を思ひ出すことが出来る。ナポレオンは部屋の真中にあるテーブルの上に帽子を投げ出して、被問者であるクリーグと云ふ老將軍の側へと歩を運んだ。老將軍は軍陣の要務に關しては、驚く程深遠な知識を持つた人で、完備した陣中要務操典の著者であつた。ナポレオンはテーブルに就いて、傍に老將軍を坐らせ、それから彼れはペンと紙とを手にして陣中の要務、軍規或は教練に關聯する多くの事項を質問し初めた。其の質問の或るものは、予の同僚達が失笑を禁じ能はざる位極めて通俗の事柄であつたが、それに關してすら彼れは全く無知識であることを示した。然かし予は彼れのする質問の數量、順序、速度、並に老將軍の答を巧に捕捉

すること、及び其の答から結果として必然來るべき問題を解決することに驚かされた。けれどもそれ以上に予を感服させたのは、彼れが部下の最下級者でも熟知して居るであらうと察せられる種々の軍務にも全く無知識なのを、配下に示して毫も心に懸けない點であつた。斯の様な態度は余をして小さな彼れを巨人の如く感ぜしめざれば已まざるものであつた。

此の他武人として必要な性質は、大なる悲運に直面しても崩壊せざる底の自信力である。ナポレオンは此の性質をネルソンのナイル海戦大捷後、エチプトに於て立派に示した。彼れは其の時同地で自給自足しなければならなかつた火薬や必需品の製造を督勵する、側ら士氣の沈頓するを怖れて、競走、音樂會其の他あらゆる鬱を散する方法を講じた。同年(千七百九十八年)八月二十一日彼れが部將クレーベルに送つた手翰は此の餘なく立派なものであつた。曰く、若しイギリス人が

此の艦隊——エチプトを封鎖しつゝある——を他の艦隊と交代し、そして地中海に横行を續けるならば、それは取りも直さず吾人をして、現に計畫してゐることよりも一層大なることを企てる様強ふるものではあるまいか。』と。ヴィルヌーヴ及びガントームの兩少將に送つた手紙も亦同様力強いものであつた。それには、イギリス艦隊はフランス軍から奪つた戦利品を安全な場所に移さなければならぬから、アレキサンドリアの封鎖を續行することは出来ない。されば其の不在に乗じて、兩人は宜しく地中海に於けるフランス、ヴェネチア及びマルタの全艦隊を糾合し、戦列艦十一隻フリゲート五隻を以て艦隊を組織し、更に一大運動を起さんとす。我陸軍を援助すべしと書いてある。ナポレオンの見解に従へば、ネルソンが獲たナイル海戦の勝利は、彼れにとつて好都合でないのは勿論だが、餘り重大なものではなく、唯一時的の障害に過ぎざるものであつた。ナポレオンがネルソンの困難を洞見した明察と、最後の結果に對する異常な自信を、海軍の敗戦を目撃したタリアンの手紙の臆病な調子に對照するのも面白い。曰く『吾々は海岸の丘

の上で此の慘劇を目撃してゐた。(中略)吾人が何時か再び郷土に上陸し得る幸運を享受したならば、何ものも吾人をして再び故郷を離るべく説得することは出来まい。現在エチプトに駐屯するフランス軍四萬の中、吾人と同様の思を懐かざるものは恐らく四人より多くはあるまい。』と。然かしナポレオンは其の四人の一人であつたので、大衆の意見も何等の結果を呈示せずして終つた。

ナポレオンの性格は敗戦に遭遇した時、最も偉大に現はれた。彼れの中年に受けた一番甚しい打撃は、千八百九年五月廿一、廿二日の兩日、ウインナの東北アスベルン・エッスリングでアーチデューク・チャールスから加へられたものであつた。實に此時オーストリア軍はフランス軍の殆ど二倍であつた。そしてナポレオンの背後のダニューブ河橋梁が破壊されたので、佛軍は大に其の策動を妨げられた。而して如何程巧妙に戦報を作製する技術を以てしても、此の戦を惨めな敗戦とよみ外に記述することは困難であつた。局面の重大は彼れの精神を沈鬱ならしめたが、更に元帥ランヌの死はそれを一層深刻ならしめた。彼れは諸將を集めて進

言を求めたが、其の意見は概して退却に傾いてゐた。然かし乍らこれは却つてナポレオンの戦闘性を呼起したかのやうに見えた。然り、彼れは斯う云ふのであつた。若しフランス軍が退却し始めたならば、遙かラインの彼方まで遁込まなければならぬ。然るに彼等(フランス軍)が踏止まつて敵を脅威したならば、自分は現位置を保持し、自軍の交通線に加へられる痛烈なる打撃を防ぎ得るのである。斯の見地から彼れは出来得る限り神速に再度攻勢に出づるが爲めに、ロベウ島とウインナを保持する決心を固めたのであつた。

これに續く六週間はナポレオンの軍事的生涯中最も光彩に富んだ期間である。彼れはあらゆる方面から兵を集め、ホーフ・エルが頑強にフランス軍をひどく壓迫してゐる北チロルからすらも兵を引上げた。又、今將にハンガリーに侵入しようとしてゐるユーージェーヌや、イタリア軍をも極力鞭撻したのであつた。彼れはシムルヤブルンスウヱック公等の率ゐてゐたドイツ國民の義勇軍の力は、それを重大視しなかつた。そしてダニューブを渡つて、殆ど無防禦なオーストリア軍の左翼に

痛撃を加へる準備を整へる間、媾和の風説を立て、アーチデューク・チャールスを牽制した。アーチデューク・チャールスの極端な警戒、プロシアの無活力、イギリス政府のアントワープ攻撃の遅延等は、敵國の中央で窮地に陥り、而かもドイツの愛國者の蜂起に背後を脅威されてゐるにも拘らず堂々ダニューブを涉りワグラムの一戦に敵を驅攘したナポレオンの腕前と餘りに明瞭なる對照を示してゐる。事實ワグラムの戦役で、彼れは何等目立つた戦術上の技巧を示さなかつた。ワグラムは單に棍棒で殴り付ける様な力づくの戦争であつた。然かしダニューブを渡河する爲めの周到な用意や、半歐の邦國の脅威に對しての傲然たる挑戰的態度は、好く彼れの立ち勝つた不撓の精神を表明してゐるものである。アスペルンの戦後、ナポレオンが豫想した通り、彼れの泰然たる威容はアーチデューク・チャールスを却かせ、又ダニューブ強行渡河の脅威は、オーストリア軍がフランス軍の後方連絡線に加ふべき攻撃を防止することを期待することが出来た。彼れの豫想は正しかつた。天才は上手を悚然たらしめたのであつた。彼れは防禦的地位に

立つてゐる際でも、敵の機先を制することを忘れなかつた。そしてフランスとの連絡を保持することに成功したのである。按ずるにアーチデ・マーク・チャールスの神経質と比較的不活潑な點とは、此の時世界の名将の列に入るべき權能を、全然彼れから褫奪して了つたのである。

僅かに一講では、ナポレオン戦争の特徴のみを記述するより以上のことは出来ない。其れは大略次の様である。

戦略の方面から見るとは、最善の作戰計畫により、出来るだけ召集した大なる兵力を以て、敏速な前進をするのが其の特徴であつた。換言すれば最も迅捷にして有效な方法に於て、戦略的攻勢を採用することがその特徴であつたのである。又彼れの戰術の特徴は、敵の弱點に對して兵力を集中し、これを衝擊することであつた。

戦略、即ち大綱みに戦争を支配するもの、而して殊に策勵の方針を選択するもの、

欠

欠

彼等の首都テュリン(トリノ)に向つて馳せてゐる道路を保持し、オーストリア軍は東北方の軍需品供給の源泉であるミラン及びマンチュアに向つて、ボルミダの溪谷を下る道路に、其の陣を敷いてゐた。然るに前年の戦争千七百九十四年九月のデゴの戦に於ける事實は、サルディニア軍は其の同盟軍がボルミダの溪谷で苦境に陥るとも、間を隔つる山脈を越えて、救援しないことを示してゐた。そしてその様な場合にはオーストリア軍も亦同様非武士的であるのは明かであつた。不統一なるが故に來る災害は、必然の結果である。ナポレオンはパリーの下宿で此の問題を研究し、既にサルディニアの屈服、イタリア領に於けるオーストリアの勢力の破滅を明かに豫想してゐたのであつた。同盟軍の楔狀戦線の尖端を撃破することは即ちフランス侵入軍の利益であり、オーストリア防禦軍の不利であることを判別した此の豫見程、彼れの全生涯を通じて立派なものはない。更に彼れはオーストリア軍がマンチュアの城壁に據らないでは、潮の如きフランス軍の侵入を到底阻止することが出来ないのを確知してゐた。そして其の城は今やフランス軍

に包圍された。であるから若しスワビアのフランス軍がイタリアの僚軍と同様に偉大な活動力を示したならば、彼等がチロルを通じて連絡することは困難ではなかつた。

此のナポレオンの策戦計畫は、單に綺羅びやかな即席作りのものではなかつた。それは少なくとも一部分、フランスの元帥メーユボアが、同方面の戦で、千七百四十五年に試みた策動の研究に據つてゐるのと、ベーゼイのものしたメーユボアの戦略の記録に、力を借りたものであつた。然かしナポレオンは其のお手本に改良を加へた。即ち當時メーユボアはリヴィエラから出發してから彼れの軍を分割し、ホー河の溪谷に侵入した時は、兩軍の距離は七十哩に達し、而かもオーストリア軍とサルディニア軍とを分離させるどころか、却つて彼等を連絡させて了つたのである。攻撃軍が此の様に遠隔の地に分離し、而かも其の地勢が山岳溪谷に富めるに於ては、そこに根柢的の弱點が介在し、戦略上の成功は到底贏ち得られない。さればメーユボアはオーストリア軍の弱劣な抵抗に對してすら、それを撃破するこ

欠

欠

來るのである。

更にナポレオン中年期に於ける戦略上の聯動操作を見るに、ウルムでオーストリア軍を殲滅に導いた戦略が最も光つてゐる。彼れが直面した問題は次の様であつた。千八百五年八月の初旬、彼れは此の時、未だブローニーニ附近に集めた精兵を以てイギリスに侵入することの可能を信じてゐたが、海上の作戦が失敗したと見るや、頗る鮮やかにこれに代る計畫を説示した。而して此の計畫は咄嗟の間に彼れの念頭に浮んだものに違ひない。ジェノアをナポレオンが併合したことを怒つたオーストリアとロシアは、イギリスの同盟軍として參戰した。フェルディナンド太公と將軍マックの引率したオーストリアの大軍は、當時既に公然フランスの友邦なるを聲明してゐた。バヴァリアを不意打しようとして、九月八日イン河を渡つて、同地に侵入したが、バヴァリアの攪亂は失敗したので、ダニューブの上流にあるウルムと其の南方アイレル河畔のメモミンゲンを占領して五萬五千のロシア軍の到着を待つことにした。これが九月二十三日のことであつた。然かし口

シア軍は十月二十日以前には、それから更に約百四十哩も東方のイン河にさへ到達することが困難であつた。而して事實今度の作戰計畫を立てたチャールズ太公は、フェルディナンド太公とマック將軍に、ロシア軍が到着するまで、スワビア方面に守勢を取り、イタリアで主要攻勢を取らせる様に計畫したのであつた。それは明かにチャールズ太公が、ブローニエのフランス軍は引續き無活動の状態を保つてあらうと考へた爲めである。少くとも八月の末までは、太公の考は正當である様に見えた。然かし此の様な兵力の配置は、若しナポレオンがダニエーブ河上流地方でオーストリア軍を撃破しようと思つたならば、頗る危険なものであつた。蓋し此の戦争程、誤れる作戰計畫から生ずる危険、及び立論の材料に對する誤つた希望から生ずる危険を明瞭に示したものは無い。凡べての行爲に於けると同様に、戦争に於ても、想像は有用な道具である。然かし其の想像は常に理性に隨從したものでなければならぬ。而して理性は恒に利用し得らるべき凡べての事物の上に働いて居なければならぬ。

勿論當時は情報を手に入れることは、現今に比して遅れがちであり、又困難であつた。假令腕木信號に依るとも、其の速度は緩慢であつた。此の時ナポレオンはオーストリア軍が、彼等の敵地バヴァリアで、情報接取に良好な手段がなかつたに引き換へて、其の點に關してはブローニエ、パリ、何れに於ても、非常に有利な地歩を占めてゐた。然かし假令さうとしても、若しフェルディナンドとマックが、四圍の事情を果敢に偵察し、そして今述べた強い想像を棄てたならば、恐らくその災禍を免れ得たであらう。

此の點にオーストリアの將帥連と、ナポレオンとの相違がある。ナポレオンは自分が戰つた他の凡べての善戰の場合に於ける如く、千八百五年に於ても亦、如何なる微細な徴候に對しても注意を怠らなかつた。彼れは一つの方針を有つて居た。それはロシア軍が、南ドイツに到着前にオーストリア軍を撃破することであつた。然かし彼れがブローニエに於て既に、同港からウルムに到る大進軍の全驛程を決定し、而してウルムでマックを撃滅しようと思つたといふ主張は、單な

るナンセンスに過ぎない。此の風説は無分別なナポレオン信者によつて廣く流布され、終に註ティールをすら欺いた。然かしながらナポレオンの書翰はブローニーの幕營を引き拂つてから二週間後の九月十三日まで、オーストリア軍がイン河を渡つたかどうかを知らなかつたことを示してゐる。實際ナポレオンが作戰計畫を作る時には、部將全部からの獻言——而かも緊急時に際しては一日に二度も三度も、その呈出を要求する——を徴してから、地圖を取り寄せて開き、コムパスで距離を測り、重要地點にピンを刺し、それから初めて新しい計畫を描き出すのであつた。斯う云ふ風で彼の計畫は全く、彼れが事物の状況を察知するに比例して開展して行つた。即ち此の時代に於ける彼れの強大なる意志は、確把し得る事實の漸次擴大する範圍に應じて活動したのであつた。

註 ティールは「ナポレオンが海から陸に眼を轉ずるや、非常な冷靜と正確とを以て數時間の裡に千八百五年の決戰の計畫を口授したと云つてゐる。デュバンも亦同様のことを云つてゐる。曰く「ナポレオンは其の時尙怒つてゐたが、少しも躊躇をせず、凡

べての事情を洞察して、アウステルリッツ全戰役の策戰計畫を口授した。而して此の計畫はミュンヘン附近の作戰にまで及んでゐる。而かも時局に變化が起つた時までを斟酌してゐる。」と。メンツァルは此の説を疑つてゐる。

九月十六日乃至十七日までのナポレオンの主目的は、自分に好意を寄せてゐる南ドイツの軍隊を、オーストリア軍の把握から救出すべく、麾下の全軍をスワビアに進入せしむるにあつた。十七日彼れはネイとランヌの軍に、十月九日ウルムに到着する様、緩行程で進軍すべく命じた。といふのは彼れは此の時未だマックが同市に接近しつゝあつたのを知らなかつたからである。即ち此の事實に關する報告は、其の時センクルーに在つた彼れの手許に、九月二十日まで届かなかつた。然かし彼れは此の報道に接するや直に新しい命令を下した。それは明かに一大旋廻運動を企圖したものであつた。それから兩三日の後、彼れは至急命令を以て麾下の六部隊で、十月十七日までにラチスボン、ディートフルト、インゴルスタット、及びノイブルグ等の地點を占領すべき行程を略授した。此れは單に敵將マック

が退却するであらうと云ふ假定の上に根據を置く概括的方略に過ぎなかつた。然るにナポレオンはマックが尙ウルムに膠着して退却しないのを見ると、彼れは捕網を一層引緊むべく前進し、同月九月二十七日にはベルナドットに、此の旋回運動を彼れに一任するつもりであることを漏らし、且マルモンがマックを壊滅するのを希望した。

此のナポレオンの確信は決して度外れのものではなかつた。何故なら彼れはマックが無能で而かも自惚れの強い將帥であるのを知つて居たからである。實際マックは不十分な兵力を以て敵地深く侵入し、ロシア軍の救援の達し得ない點まで突進する無謀を敢てしたのであつた。ダニュープ河谷はフランス軍の運動を便宜ならしめ、彼等を容易に敵の背後に迂回せしめた。フランス軍は漸次結集し、遂に十八萬七千を數へ、これに南ドイツ諸邦の兵二萬八千が連絡した時に至つては、殆んどオーストリア軍の勢力の三倍に達した。此の格段に優越した兵力を以て、彼れは最後の包圍運動を敢行した。即ち騎兵の移動幕に掩蔽した大部隊を

敵の背後に迂回させた。古來何の戦争に於ても騎兵が此の様に目ざましい仕事をしたことは未だ嘗て見ない所である。而して此の戦争はナポレオンが騎兵を最高能率にまで行使した、最初の戦であるといふことも見遁してはならない。千七百九十三年に一砲兵士官であつた彼れは、イタリアで巧みに歩兵戦術を行使し、而して今や、假令ミューラーが立派な實演者であつたとはいへ、スワビアに於て騎兵に對しても亦同様の能力を示した。前面に側翼に、背後に敵を混亂させたフランス騎兵は、マックをして其の主攻撃が何處に落下すべきやを迷はしめ、フランス軍は偉大なる最後の勝利を獲得したのであつた。

然かし十月十日までは、未だマックは南方即ちウルムからメモミingenに退却し、更に其處からイーレル河谷に沿つてチロルに遁げ込むことが出来たのであつた。此の方法は彼れに取つて最も安全なものであつたが、彼れはフランス軍の策動を少しも知らなかつた爲めに、唯東北方に向ひダニュープ河畔の敵を撃破することのみを企て、遂に遁路を失つて了つた。マックは此の攻撃に多少の成功は收

めたが、ナポレオンは毫しも顧慮する處なく、ネイの軍を急ぎ立て、エルヒンゲンに向つて果敢有效なる攻撃を加へさせ、今や既に死を宣告されたオーストリア軍を圍む包圍線を鐵桶とし、更に同日(十月十四日)他方元帥スールをしてメムミンゲンを占領せしめた。斯くしてロシア軍に備ふべく分遣した一隊の外、全フランス軍はウルムに向つて進軍し、十月十七日から二十日までの戦に於て、殆どマックの全軍を降服するの餘儀なきに至らしめた。ナポレオンは茲に比較的少量の損害を以て、約七萬の敵を吞滅したのである。

彼れの俊敏な戦略に對する、相手の缺點だらけな戦略、或はマックが事物の徴候を考察する無能等から見て、此の前古未曾有の戦果も當然の事であつた。全く此の時皇帝(ナポレオン)は千七百九十六年に、敵のオーストリア軍が屢々實施した、大規模の包圍運動を自ら代つて試みたものである。實に是れはナポレオンがマックを他の場合には危険であるべき此の實驗も、彼れに對しては安全に實行され得る人間と正確に判断したからである。兵力の相違、西北から侵入するに好都合な

地勢、オーストリア總帥の性格、それに手に入るべき莫大な獲物等は、此の大膽な戰略の正當なりしことを認證する。事實此の戦は天才ナポレオンがものした光彩陸離たる幾多の傑作の中に列伍すべきものの一つである。

此の大勝利の十日前、即ち十月七日にノエルドリッゲンに於て發した布告から、最後の戦果に對して懐いた彼れの自信に就いて、少なからざる證據を見出すことが出来る。彼れは其の布告で軍隊に、フランス軍は大旋廻運動によつてブラック・レストの障害と、チロル方面から加へられる可能性ある凡べての攻撃を避け、今や敵の背後に出でたことを指摘し、且敵が全滅を免がれようとするならば寸刻の餘裕もないものであると云つてゐる。而して此の布告の日附が正しいならば、これは取りも直さずナポレオンが麾下將卒の士氣を最高潮にまで高めようとする希望を抱いたことを立證する珍らしい證據でもある。ナポレオンが戦の目的を貫徹するには、どうしても士氣を極度まで鼓舞する必要があつた。即ち此の時フランス軍は頻りに臻る猛雨を冒し、長途の行軍を忍び、殊に夕刻には糧食の缺乏

とすら戦はねばならなかつたからである。マルモンの糧食缺乏の不平に答へて、元帥ベルチエーは意味深い言葉を云つてゐる。『マルモン元帥は何時の手紙でも兵站部のことに云ひ及ぼさないことはない。然かし余は其の度毎に、目下皇帝が遂行せられつゝある侵入戦、殊に神速なる運動に於ては、軍需品の貯蔵所を設くることは不可能であると繰返して答へる。而して指揮官たるものは、必要なる供給を、通過して來た土地から獲べく考慮しなければならぬ。』と。此の點にナポレオンがウルムに於て勝利を得た原因が潜在してゐる。彼れは火急の場合には軍需品貯蔵所の設置に關する衛生上の法式を無視したのみならず、必要缺くべからざる規則をも等閑視して、軍隊に食糧は彼等自から得べき様強制した。これは勿論軍隊に非常の苦勞を課したと同時に、終にヨーロッパの諸國民が彼れに背反した一因となつた劫掠の風習を軍隊に染付けたものである。然かし茲當面の問題として、千八百五年十月の重大時期に、此の戰略によつて獲た所の神速なる行動はオーストリアの敗北、延いては第三次對佛大同盟の瓦解を確實に馴致したのであ

つた。

ナポレオンのダニュール河上流、ラチスボン附近に於ける行動は、巧妙な戰略的構想に基く戰術的成功の模範として詳密に研究すべき價值が十分にある。千八百九年四月二十二日のエックミュールの戦役に關係ある彼れ閱歷中の此の挿話は、彼れの仕事の中で、最も見事なものとして當人自ら大自慢であつた。兎に角此のエピソードは珍らしい。エックミュールの戦は非常な混戦であつた。事實戦に参加した敵軍(オーストリア軍)の数はフランス軍に勝つてゐたが、其の獲た實果は決して大きいものとは云へなかつた。ナポレオンは此の事件を四月十九日より二十三日までの五日に亘る戦闘中最も傑出したものとして撰び、而かも此の五日間の戦を一聯のものとして取扱はうとした。實際此の戦役所謂ラチスボンの役の戰略運動は、ナポレオンが戰士の技能中、最も困難なもの、一と稱した問題、即ち守勢から攻勢への過程を非常に明瞭な方法で以て説明してゐる。而かもこれ

に併せて此の戦役は戦略と戦術を完全に驅使し得る彼れの腦裡に於ける兩者の密接な連絡を指示するものとして、注意すべき價值がある。又最後に此の運動は、戦争の初期に機先を制し、優越な立場を保つことは頗る大切な條件であつて、これによつて、我れの欲する所に於て而して敵の欲せざる所に於て、我れの欲する方法により、而して敵の好まざる方法に依つて、敵に戦争を強ひ得るものであることを示すものである。

千八百九年の戦争が開かれるや、オーストリア軍は千八百五年と同様、ナポレオンが豫期したより些か早く彼れ(ナポレオン)の同盟國たるバヴァリアに侵入した。斯う云ふ次第でオーストリアは先手の利益をラチスボン及び其の附近(バヴァリア)に獲たが、而かもカロロ太公が若しボヘミア山地を通過する一層短距離の進路を取つたならば其の利益は更に一層増大することを得たであらう。然るにカロロは、他方面に於ける彼れの光輝ある經歷をも凋萎させた決斷力の缺乏といふ一大缺點の爲めに、此の捷徑を取らずに、ダニューブ南岸の長距離な道程を進軍した

ので、遂に廣い地域に散在してゐたフランス軍から決定的大勝利を奪ふ好機を逸し去つて了つた。此の時(四月初旬)一方フランス軍の總參謀ベルチエーは、ナポレオンが未だパリを出發しなかつたので、一時在獨フランス軍の指揮を管掌して居たが、彼れも亦斯かる非常の場合には、其の器に非ざることを自ら明瞭に證據立てた。即ち彼れはパリから來た訓令を誤解したり、或はオーストリア軍の攻撃によつて混亂せしめられたりしたが、而かも尙其の無爲無策なる恰も敗戦を求むるが如く、依然として全軍を無連絡の儘で各地に散在させて置いた。千七百九十六年以來ナポレオンの右腕となつて働いたにも拘らずベルチエーが、ナポレオンの得意の戦略であつた、重要地點や最良進出線に軍を集中する技術を得得しなかつたのは、實際不思議に感ぜられる所である。ジ・ミニは『ベルチエーは二十回に及ぶ彼れの經驗した戦争から、戦略の第一原則すら把み得なかつた』と論斷してゐる。斯かる不決斷と失策とは、恐らく其の源を彼れの元氣の缺乏に發してゐるのではあるまいか。彼れ(ベルチエー)の幕僚であつたルジャースは『彼れは責任の重

荷に戦き、これに壓服され、四晝夜の間アウグスブルグ、インゴルスタット、ドナウヴェルトの三角形上を馬に騎つて徘徊してゐた」と述べてゐる。彼れは實際度を失つてゐたのであつた。即ちベルチェーは、自軍の大部分がラチスボンより南西約八十哩も遠距離にあるアウグスブルグ附近に散在し、且此の時オーストリアのカロ太公が九萬の兵を率ゐて、ミュニヒの東北方イーザル河畔の町ランヅフットに向ひ進軍しつゝ、あつたにも拘らず、強大な兵力を以てラチスボンを維持すべきことをダヴァーに命じた。取りも直さず、ベルチェーは前記の三地點(アウグスブルグ、インゴルスタット、ドナウヴェルト)によつて形成せらるる三角形上、否それ以上の廣範圍に分散してゐるフランス軍と、ラチスボンを守るダヴァーとの間に大間隙を作つたものである。であるから若しカロ太公が西進を續行したならば、此の大間隙に容易く楔子を打ち込み、敵軍を顛覆して、それを個々に粉碎することが出来たのであつた。

斯くの如き形勢は四月十七日、即ちパリイを出でて戦線に急ぎつゝあつたナポ

レオンがドナウヴェルトに到着した時のものである。ナポレオンは直ちに危機の切迫せるを知り、散在してゐる軍を集合すべき手段を取つた。即ちラチスボンのダヴァーに向つては西方インゴルスタットに退くべく、他のフランス軍には最大速度を以て、インゴルスタット及び同市南方の一小河イルムに沿うて一集團を作る様に行動せしめた。フランス軍の神速なる行動と敵(オーストリア軍)の遅緩なるそれとは、幾許もなく状態を顛倒せしめた。四月の中旬、カロ太公が若し此のことを察知したならば、勝利は其の手に歸したのである。然るに彼れは此の好機を逸してしまつた。而して「敏速なれ、敏速なれ！ 而して神速なれ！ 余を汝に委託す。」と云ふ不滅の訓令を以て、元帥マッセナを西南方面より急遽召致したナポレオンは、既に凡べての要害を我がものとして、敵を攻撃することが可能となつた。然るに一方カロ太公は、此の時ラチスボンを占領すべくランヅフットから北方に兵を分派する計畫を立ててゐた。此の運動は彼れ自身とポヘミアとの聯絡を確實ならしめ、且此の時同地方から進んで来る二つの自國軍の援助をも確得

し得るものであつたから——若し特に彼れの運動がダヴィを捕へ得るならば尙一層——それは非常に稱讚に値するものであつたのであるが、事實に於て此の運動は彼れの正面に於ける優先的地位を奪ふのみならず却つてナポレオンに自軍の側面を曝露するが如き不利益を齎らすものであつた。此の喜ぶべき報知に接するや皇帝ナポレオンは昂然眼を上げて豪語した。「さうか、余は彼等を破つた。敵軍は全滅だ。吾々は一ヶ月以内にウインナに入城する」と。

ナポレオンは今や敏捷に、戦争に對し最も重要にして又決定的性質を有する『機先』を制した。然るに一方外側弧線上に散在してゐたオーストリア軍は、此の時迅速に集合した常勝の敵の面前で危険極まる側面行進の運動を繼續しつゝあつた。此の際若しカロロ太公にして西進し、フランス軍を打破つて後、此の分派運動を起したならば、些しの危険も感ぜず其の目的を達し得たであらう。事實は、吾人が見た通りに進行した。太公は今迄掌中に握つてゐた優越な地位を取り落し、それをナポレオンが代つて素早く拾ひ取つたのである。現に四月二十日に至るも尙

フランス軍と其の同盟軍——南ドイツ諸邦の軍——は、凡そ十四萬のオーストリア軍に對して十一萬の比を爲す劣勢にあつた。然るにフランス軍の集中とオーストリア軍の分散とは全く戦争の勝敗を轉じてしまつた。千八百十四年モンミライの戦闘に初まつた連続戦の様に、ナポレオンは内線作戰、従つて敵よりも狭小な範囲内で行動し、敵を粉々に破碎し、カロロ太公は、ラチスボンを少數のフランス守備兵の手から奪取したることによつて、僅に死地を脱し得る始末となつた。

ナポレオンの此の戦役に於ける巧妙な戰術的手腕に對する稱讚の程度は、カロロ太公の失策を認むることに依つて減ぜらるべきではない。如何となれば最も偉大なる武將は、相手が誤つた手法を取つた時、それを看破して直ちに強打を加へるものであるからである。然かしながらベルチエーがダヴィにラチスボンを占領すべく命じた輕卒なる訓令が、却つてカロロ太公の、北方ラチスボンに兵を分派することを誘起し、それが彼れ自らをナポレオンの槌下する神速な攻撃の下に曝露した一大失敗の原因となつたと云ふ所も、公平な立場からすれば十分讀んでや

らなければならぬ。皇帝(ナポレオン)が彼れの參謀(ベルチエー)を待つに出來得る限りの寛大を以てしたのも、多分此の様な理由からであつたらう。ベルチエーはナポレオンの恰好な引立役であつた計りでなく、彼れの失策は主君の比類稀なる勝利に少なからざる貢献を致したのである。

此の重大な數日間に於けるナポレオンの戰術的運動からも幾つかの缺陷を看出すことが出来る。フランスの陸軍大將ボナルは、ナポレオンが同戰役の初頭、オーストリア軍のウインナとの連絡線をランヅフットで遮断しようとする強い執着に迷はされて、敵を撃破する絶好の機会を逸し去つたことを非難してゐる。而して此のボナルの非難を支持する事實が多々存在してゐる。又ナポレオンが、オーストリア軍をダニューブ河に追落すことが出來たのを、ラチスボン正面の成功を過大視して、麾下の軍隊に——假令疲勞してゐたとは云へ——最後の追撃を命じなかつたのも事實である。其の結果太公(カロロ)はダニューブ河を横切つて軍を引き上げ、ボヘミヤに向つて安全に退却することが出來たのであつた。然かし

五日間に互る戦争が假りに完全無缺でなかつたとしても、此の戦争は全然戦争の局面を一變したものであつた。即ち非常な危険に面して、分散してゐた軍隊(フランス)を危地から救出し、それをそれまで成功してゐた軍隊(オーストリア)を驅逐する強固な一集團と變じ、終にウインナに到る最も重要な道路の支配を獲得したからである。五度に互る戦勝と敵國首都への比類稀なる進軍は、結局卓拔な戦略と不屈の信念から出て來た成果であつた。

ナポレオンの戦略から戦術へ研究の歩を進めると、吾人は面喰ふ程澤山の實例に出喰はす。アウステルリッツの戦は、多くの戦の中でも、最も完全なナポレオン風の戦争である。此の戦は從來人口に膾炙する所であるけれども、事實吾人はこれ以外、あれほど完全にナポレオンの概念を描出したものを看出すことが出來ない。千八百五年十二月一日、即ち戦の前日に於ける情況は次の様であつた。本國フランスより八百哩も進出し、而かも今まで破られたことのないロシア軍と、ウル

ムの戦に敗れたオーストリア軍の残兵とに對峙したナポレオンは、自己の地位の危険なことを實感し、プロシアが彼れに宣戦し、其の連絡線を遮断するに先立ち、戦争を決定的終局にまで齎らすべく計畫を定めた。それ故彼れは殊更常でない穩かな調子を見せて、ロシア帝アレキサンドル一世に講和を申込んだ。然かし此の提議は年若く感動し易いアレクサンドル一世を、過信を以て鼓舞するの結果を導く以外何ものをも齎らさざるものであつた。聯合軍——ロシア、オーストリア——の進撃以前に退却したフランス軍は、ゴールドバッハ河の後方(西方)で、ブリュン町の前方(東方)に横はる緩傾斜の丘岡に陣を占めた。そしてナポレオンは「戦に臨むに當つては、汝の有する總兵力を集中すべし。一部隊と雖も閑却する勿れ。一大隊の兵も屢、其の日の勝敗を決すればなり。」といふ彼れ自身の原則に従つて、戦ひ得る兵を悉く此の地點に集めた。此の格言は此の戦争に當り明瞭に其の眞實なるを證據立てた。何故ならばダヴィ麾下の一小部隊がアウステルリッツの勝敗を決定したと云ひ得るからである。ナポレオンは同部隊をウインナから呼び

寄せたので、ダヴィは一萬一千の兵を率ゐ四十八時間に九十哩を突破して、戦の前夜到着し、最も激戦が起るべき可能性のあつたフランス軍の右翼即ち南方へ戦線を延長した。

ナポレオンはやがて戰場となるべき附近の地形を詳細に検討し、自惚れた敵軍の確かに採ると考へられる計畫、即ち彼れが現在直接軍需品の供給を享けて居るウインナから、彼れを遮断せんとする敵の企圖を、天才的直観によつて察知した。實際に於ては、ナポレオンは他に一層短距離であるフランスへの交通線を有してゐた。ブリュンクラッタウラチスボンの線がそれであつた。然かしナポレオンは、聯合軍が此の線に注意しないで、南方ウインナ經由の線を遮断し、延いてフランス軍の右翼を壓迫して、これを北方の山間に追ひ入れ、而して其の點へ進出して來たプロシアの前衛をして徹底的に打撃を加へしめようとするのを明かに豫見したのである。而して聯合軍は此の旋回運動を取るには、深甚の注意を以てすべきであつた。如何となれば彼等の起さんとする策動は、其の左翼をザッチャン及び

メニッツなる二つの人工湖に押付け、運動の範圍を甚しく拘束するばかりでなく、其の目的を達する爲めには三つの村落を占領する必要があつたからである。此の危険な作戰計畫の作製者ヴェイローテルはナポレオンの天才、フランス軍の兵力及び自軍の運動の危険率を、いづれも過少に見積つたのであつた。蓋し此の計畫は、彼我兩軍の勢力を殆ど均等ならしめたダヴィー軍の到着以前に作られたものであつたからである。然るにナポレオンはダヴィーの参加によつて、今や約八萬の聯合軍に對し、七萬の兵を擁することとなつた。而してナポレオンの左右兩翼に守勢を取り、中央より攻勢に出でんとする作戰計畫は、彼れに兵を集中することを可能ならしめた。即ち彼れが右翼に控持すればする程、軍を内線上に集合することを得、聯合軍は此の方面に地歩を得れば得る程、軍を外側弧上に延長し、其の結果中央部を薄弱ならしむるのであつた。ナポレオンは彼れの戰略的コンビネーションを指導した根本法則を、戰術に於ても遵守した。即ち彼れはスール及びベルナドットの軍より成る其の中央軍が、聯合軍の中央軍に占領されてゐるブラッツ

エンベルグなる丘岡を襲撃する間、前日までの長距離行軍に疲れたダヴィーの軍が尙能く、頑強に勝つ望なき牽制戰闘に従事すべきことを知悉して作戰した。實にこの丘は塙露聯合軍の陣地の鑰鍵であつた。然るに聯合軍は此の點に重きを置かず、ナポレオンの右翼軍ダヴィー麾下の一萬二千弱に對して約四萬の兵を差向けること程左様に、敵の右翼に活動すべく熱心であつた。其の結果中央軍を指揮するロシアのクツゾフ將軍は、北方にリーヒテンシュタイン麾下のオーストリア兵の大部隊を控へてゐたとは云へ、手許には約一萬七千の歩兵より残つてゐなかつた。ブラッツエンベルグ丘は、フランス軍の攻撃を撃退するとすれば、砲兵を以て十分に防禦すべきであつたのに、聯合軍には其の優勢なる砲兵をよく用ふることをしなかつた。ジ・ミニは聯合軍は此の時三百三十門の大砲があつたと云つてゐる。けれども活動したのは確か、其の中極少數に過ぎなかつた。これは恐らく其の多數がナポレオンの右翼を襲はんとする左翼の密集縱隊團の方へ、持ち去られたからであつたらう。然るに同方面は濕泥の地であるので、大砲は多く用ひら

れず、其の日の暮方に及んで、フランス軍の爲めに脆くも鹵獲されて了つたのである。吾人は聯合軍の缺陷だらけの作戰計畫と、其の爲めに非常に利益を受けたナポレオンの決心を知る時は、恰も鳥瞰圖を見る様に、直ぐ此の戦鬪の進展を會得することが出来る。想像はそれからそれへと畫かれる。聯合軍の戦線殊に其の中央部に於ける罅隙、中央ブラッツェンベルグより左翼へ掛けての其の日拂曉に於ける旋回運動、テルニッツ、ゾケルニッツ兩村及び其の附近に於けるダヴー元帥の強靱な抵抗。此の時北方フランス軍の中央部では二個兵團の密集部隊が、ブラッツェンベルグの傾斜面に向つて運動を起す。ブラッツェンベルグはこれに餘り強い抵抗をしない。間もなくその頂上には僅かに守備兵の半數が止まるばかりとなる。更に北方の低地ではランヌとバグラチオンが終日互角の勢を以て戦ふ。先づブラッツェンベルグの丘上で、フランス軍が決定的成功を獲得する。勇敢な老クツゾフの奮闘努力があつたにも拘らず、スールとベルナドットは此の守將を次第に押し付ける。ロシア軍の逆襲は斷然撃退される。ロシア近衛軍の隊長コ

欠

欠

したフレデリック大王と違つて、ナポレオンは安靜の裡に居ることも出来なかつたし、又さうしようとも思はなかつた。政治家としても、亦武人としても、何時が彼れの止まる時であるかを見る事が出来なかつた處に、彼れの滅亡の根本原因が横つてゐた。

半島戦争は若し彼れが、ジ・セフ・ボナパルトを呼び返へし、フェルチナンド七世をマドリッドに召還したならば鎮まつたであらう。然かし彼れは中部ヨーロッパで大兵を要する千八百十三年中ですら、斯くすることを屑しとしなかつた。此の戦争(半島戦争)が終つた時、彼れは兄ジ・セフを王としてイスパニア人に強ひる爲めに、多くのフランス兵を犠牲に供したのは、大なる過失であつたこと、及び今となつてはイスパニアが先天的にフランスの同盟國である理由から、マドリッドにジ・セフを君臨せしめた様に速に先王フェルチナンドを召還してもよいと思つてゐると告白した。即ちナポレオンは此の問題を二十五萬の兵を失つてから漸く悟つたのであつた。

然らば吾人は、彼れがイスパニア遠征に資源を竭しつゝある時、ロシア征服を企てたのを如何に観るか。千八百十二年六月、屬邦君主を前にして彼れがドレスデンに行宮を構へた時、フランスの提督デクレーはバスケーに向つて、ナポレオンは再び六リーに還り住むことはないだらうと云つた。バスケーは聞き返した「何！それではナポレオンはモスコウかベテルスブルグを首都としよう」と云ふのか。』答は更に返された。「彼れはどの都にも長く居る氣遣はない。否恐らく彼れは今度の戰（ロシア遠征）から歸つて來ないだらう。若し一步讓つて生還するとも、軍隊を失つてゐるに相違ない」と。此のデクレーの豫言は非常に意味深いものである。何故ならば彼れは千八百三年から翌々五年に亘つて企てられた、ナポレオンのイギリス侵入の計畫を討究して、其の非常に危険なることを感得してゐたからである。然かしフランスに取つては幸福にも、丁度シドニー・スミスがアクレで千七百九十九年の東方遠征の夢を醒ましたと同様に、ネルソンがそれを邪魔して了つた。けれども千八百十二年にはモスコウに達するまで何者も彼れを妨げることをし

なかつたのである。

註 シーニア曰く「千八百五十四年にティールは、ナポレオンの没落は千八百八年から始まつたことは確かであると云つて居るが、余はそれを千八百十二年からとする。如何となればナポレオンはロシア遠征を起すに先立ちて、イスパニアとの戦争を止めることが出来たからである。」

自信は貴重な資質である。千八百九年四月には、それは明かにカロロ太公を相手に局面を改變される様、ナポレオンに助力した。然かし其の年以後、彼れの自信は輕卒に流れ、無謀に敵を侮る如き性質に變退した。恐らく此の缺點は、虚大妄想的傾向を彼れの性質の中に増加せしめたマリアルイザとの結婚によつて、一層深められたものに違ひない。千八百十二年の戰に際し、彼れは確かに「慎重」なる訓戒を無視した。確實な策源地を持たずに廣漠たる敵の領土に侵入するのには大なる危険が伴ふ。同年八月十七日、スモレンスクを占領後、彼れは此の危険を避ける爲めに、手近に友邦ロシアニアを控へて前衛軍を其處に冬營させる別方針を立

てた。さうしたならば翌春機を見てモスコウなりベテルスブルグなりへ再び進軍を起し得るのであつた。これがナポレオンの一つの考でもあつた。彼れは斯ういふ計畫を立てたが、さて一方實際の状況は如何であつたか。ナポレオンはモレンスクまで進軍する間に、既に十二萬の兵を失つてゐた。而かも此の損害は正當の對敵行動に因るよりも、寧ろ疫病と劫掠から來たものが大部分であつた。而してロシア軍の司令官バークレイがグラントアイミー(フランス軍)を奔命に疲らすべく戦はずして敵を惱ます所謂ファビアンタクティクスに依るは明かであつた。然かしナポレオンは未だ尙自己の威望を信じて、進軍を繼續し、決定的な戦勝を得、モスコウに入つて敵に和を請はせようと心に決めてゐたのである。彼れは恰もオーストリアかプロシアに居る様な考で計畫したのであつたが、それはよく組織立てられた國との戦に當嵌るものであつて、ロシアに對しては効果少なきものであつた。

事實ナポレオンは此の時心臓もなく神経節もない無定形アメーバ的有機體に

等しいロシアと戦つてゐるのであつた。ロシアは多くの村々の集合であつて、それらは各々個別の共產體、彼等の所謂 *tribes* を有してゐる。さればあの時彼れがモスコウまでも大軍の楔子を打込んだにも拘らず、ロシアは何等致命的打撃を受けず、殆んど常の如く生きてゐた。五週間の舊都(モスコウ)滞在中にも、前からの目論見は彼れの腦裡から去らなかつた。彼れは何者も撓め得ざる決心——それが若し狂的色彩がなかつたならば、確かに壯烈なものであつた——を以て、アレクサンダーがモスコウで讓歩を肯じなかつた媾和條約を、ベテルスブルグに於て強制すべくそこに進軍する計畫を按じつゝ、十月中旬を徒費して了つたのであつた。此の時日の遷延こそナポレオンの運命に致命傷を與へたものである。けれども世上に流傳せらるゝあの退却の惨害が、例年より取り分け早く來た嚴寒に因るとする説は皮相の觀察乃至謬説に過ぎない。なぜなれば嚴烈な沍寒は彼れが退却を開始してから十八日経つた十一月八日に初めて來たからである。然かしながら兎に角彼れが若しモスコウで實行不可能な計畫を立てる代りに、十月初めに同市

を出發したならば、其の軍隊の大部分を助け得たであらう。ナポレオンはロシア軍がマロヤロスラヴィッツで、彼れが西南に退却するのに加へた妨害を、撃破することが出来なかつたので、餘儀なく自分が荒廢せしめた往路を踏んで退却した。其の中に嚴冬の襲來は容赦なく、グランドアミーが變形した、掠奪軍の不幸を完全ならしめたのである。斯くしても尙フランス軍崩壞の原因の凡べてを、沍寒に歸すべきであらうか。否吾人は寧ろそれを、嘗ては鋭利なる洞察性を賦與せられしも、今や四圍に逼り來れる一般的凋落を計算に加へざりし人、それ自身に存するとなすものである。

ロシアとイスパニアと兩國では、ナポレオンはそのいづれに於ても、唯だ敵の軍隊と戦つたばかりでなく、其の國民と戦つた。否それのみならず更に自然力を相手に戦つたのであつた。不思議なことに、嘗て地理と歴史に勤勉であつた此の學生は、晩年の戦争では、此等兩學科の教を無視してゐた。如何なる侵入者も未だロシアの中心に入つて、これを征服したことはない。又如何なる大陸軍と雖も長きに互つてイスパニアを治定し得なかつた。實際カルタゴ人、ローマ人、或はムーア人等は地中海を抱擁して後、此の半島(イベリア半島)の大部分乃至全部を征服し得た。西ゴート人とフランス人はトゥールース(佛國南部の都市)より、これを統治せんとしたが共に成功しなかつた。即ちイスパニアを征服するには海上權を要したのである。然るに今やイギリス海軍が目前に控へて、イスパニア及びポルトガルの愛國者を援助し、且フランス軍の側面を脅威しつゝあるにも拘らず、ナポレオンは此の教訓に背いたのであつた。シャールマニエ大王やフランスの諸帝王は、當時イスパニアを後援する大海軍がなくなつてすら、同半島を征服し且維持することが出来なかつたとしたならば、如何にナポレオンと雖も單り軍隊のみならず、全國民が彼れに反對し、數個の軍團と無數の義勇軍とを組織し、狂熱的愛國心を以て抵抗し、これに加ふるに、ウエリントンの軍とイギリス艦隊が、それを支援する如き四圍の形勢不利なる場合、此の遠征に成功しようと云ふ様な希望は、どうしても抱くことが出来なかつた筈である。其の上地理的狀態は如何であるか。五條の山

脈國內に連互し、北部は山彙に満たされた同地の地圖を一瞥すれば、此の遠征が如何に困難であるかは明瞭である。斯くの如き土地に於て土匪的性質を帯ぶる軍隊と住民を打ち破るも、それは征服とは言ひ難い。事實元帥ジュールダンが云つた様に、フランス軍は占領區域を擴大すればする程損害は大きくなり、彼等の地位は層一層危険を増すのであつた。されば千八百十年と翌十一年の如くウエリントン軍とイスパニア主力軍を遠く西邊に壓迫しつゝあつた時が、フランス軍の危険と困難とは絶頂であつたのだ。されば千八百十二年となつて、ナポレオンは避く可からざる事件に、頭を屈しなければならなかつたのであるから、ロシア遠征の失敗器量一杯振舞つた所で、どうしてもエプロ河北の諸州即ちフランス國境近くの土地の占有を以て、満足し置かねばならなかつたのである。然るに彼れの慢心は此の安全な手段を取るのを拒んだ。そして膨脹し過ぎたナポレオン帝國は、イスパニアとロシアの兩方面に受けた二重の緊張の爲めに、拗ち斷れて了つたのであつた。

千八百十二年ロシア遠征に失敗して、あの大災害を蒙つたのにも拘らず、彼れは依然獨逸の支配を意味する大陸制度を固執してゐた。然のみならず、其の過大の自信力は又、千八百十三年の諸國民戦争の後期に於て、彼れの先見の明を毀損した。サクソニアの陸軍大佐ファン・オデレーベンは、ナポレオンが自分の先入見に當てはまらない時は、如何なる忠告をも受け付けず、彼れの計畫の實行不可能を他人が論じると『あゝ、さう云ふことは不可能だ。』と云ふ皮肉な言葉で應酬したと記してゐる。實際ナポレオンはインポッシビリティが、直面して彼れを疾視するまでは、一旦定めた決心を棄てなかつたのである。

自分は此の千八百十三年の戦争を、彼れが戦つたものの中最も拙劣なものとして斷定する。何故なれば今まで同盟してゐたオーストリアが叛いて敵の聯合軍に加した上は、オーストリアに背面を脅威せらるゝ虞なき線に兵を集むべきことは明かに必要であつた。然らずとするも、彼れが依然としてハンブルグからドレスデンに至るエルベ河の戦線を保持せんとするならば、聯合軍がボヘミア山地から

彼れの背後に進出し、フランスとの連絡線を遮断すべき主なる道筋を、塹壕に據る兵を以て妨碍しなければならなかつたのである。然るに彼れはシレジア其の他遠隔の地の兵をすら引揚げず、又ポヘミヤ山地をスクリーンとして活動してゐる聯合軍が、自由に背面を襲撃するのを其の儘にして置いたからである。事實ナポレオンはドレスデンに聯合軍を撃破した。これは彼れの最後の勝戦であつた。然かし彼れはそれに續いて發作した麻痺症状の爲めに勝利の戦果を全うし得られなかつた。此の發作は彼れの下した不確正なる追撃命令及び其の結果クルムの隘路にヴァンダム軍が多大の損害を蒙つたことを説明する。以後代將麾下のフランス軍の精銳は三度破られたが、これらの敗戦もエルベ河戦線の危険を彼れに會悟せしめ得なかつた。否これに止まらず、彼れは聯合軍が周圍に網を引き緊め初めたのに氣が付かず、時としてベルリンの占領及び東方百餘哩を距つるオーデル河畔駐屯兵の救援計畫にすら慮を運らした位であつた。斯く誇大な妄念を抱いた彼れも、元帥ネイがデンネウイツに破られたと聞いた後の様に、時とし

ては軍を西方エルフルトまで退却せしむべく考へないでもなかつた。然かし彼れは躊躇遠巡空しく日を送るのみで、それを實行しなかつた。そして遂にサンシルの軍をドレスデンに放置しなければならぬ状態に立到り、彼れ自らは殘餘の兵をライプチヒに集め、こゝで彼れは破られたのであつた。此の敗戦は全く適時にサンシルの軍を招致しなかつた彼れの怠慢に因るものである。

當時のナポレオンはリヴァリ、ウルム、イエナ時代のナポレオンではなかつた。其の好戦性と意志の力は依然衰へなかつたが、洞察力に障礙を生じて居た。而して一番悪いことは、彼れの頭腦が事件の輕重を正確に計量するに堪へなくなつて來たことであつた。マルモンが認めた通り、彼れは自分の考に一致することのみが正しいものであると考へる様になつてゐた。彼れは戦勝つてベルリンに入城しようとする幻想に驅られて判断を誤つた。であるから彼れは戦に敗れると、麾下の軍が疲れた若者から成り、而かも相手のプロシアには大戰略家のグナイゼナウ、副將ブリュッヘル等の輩出したことなぞを考へずに、代將を嚴しく詰責した。

少壯時代に彼れと大刀打の出来る敵手に邂逅しなかつたのは、ナポレオンの幸福であつたが、其の結果敵を侮る觀念が、彼れの腦裡に植ゑ付けられるに至つた。此の觀念はイタリア、スワビア或はモラヴィア等で一時奇蹟を演じたが、晩年には却つて彼れを不幸に導いたのであつた。

時間に制限があるのでウ・イトルローの戦の十分な検討が出来ない。故に吾人はこれに關し、皇帝(ナポレオン)がブリュッヘルとウエリントンを個々に分離驅逐し得る線上に兵を集中する計畫は、大膽で且正當なものであつたといふことを述べるだけで満足しなければならぬ。要するに此の計畫は彼れの第一次イタリア遠征の初頭に於けるそれと類似したものである。恐らく物覚えのよい性質は、あの華やかな時代の記憶を失はずに、一旦分離した聯合軍は二度合致する様なことはあるまいと確信したに違ひない。そして又彼れがリニイでプロシア軍を破つた後、敵は丸一週間は全く其の戦闘力を失つてゐるだらうと信じたことも確かである。即ち彼れがそれに次いで下した緩慢な追撃命令及びウ・イトルロー

戦役の緒戦期に、プロシア軍が強行軍を以て彼れの右翼を襲撃する能力ありと信ずることを拒否した理由を、これが説明する。戦を始めるに當り彼れは、其の前夜(六月十七日の夜)深更に、プロシア軍が三萬一千のビュロー軍の來援により、著しく強大となつたのを知らなかつた。然かし彼れは確かに彼等が合一する場合を考へ、又測られざる事件——敵に好都合な——の勃發に備へ、當然幾分の餘裕を保持すべきであつた。然るに彼れは此の當然行ふべき手心を行はなかつた。ナポレオンはリニイの戦闘及び其れ以後に於て、プロシア軍は死傷者脱走者等約四萬五千の損害を蒙つてゐると推量し、且十八日戦闘の頂上であつた午後四時頃まで、恐らく彼れは捕虜にした一プロシア人の陳述通りに、自軍の右翼を攻撃するのは唯ビュロー軍、プロシア軍ばかりだと思つてゐたらしかつた。

譯者註、開戦當初に於ては、ナポレオンはビュロー軍が戰場近くへ來着したことを知らなかつたが、其の後、ビュロー軍の來着を知つた。然かしウ・イトルローに彼れを攻撃し得るのは此のビュロー軍のみで、ブリュッヘルの軍の來襲を信じなかつた。

更に悪いことは澤山あつた。彼れは非常な輕卒な考でウエリントンと戦ひ、且その戦闘を朝食前の仕事の様に思つてゐた。彼れはいつもウエリントンを輕侮してゐたのみならず、ウ・ートルローではイギリス軍の陣地の潜在力、詳言すればそれが第二線及び豫備隊を隠匿し得る優越點を念頭に置かなかつた。彼れは又ウーゴーモンの攻撃に餘り兵力を使ひ過ぎ、且戦闘の始まつた計りにデルロンの軍に甚しく密集した隊形で攻撃を敢行させた。加之、彼れは戦闘の末期、即ち午後四時から六時の間に騎兵を以て、花々しいけれども効果のない攻撃を企て、兵力を徒費した。後になつてから、ナポレオンはネイや他の將軍達に此の騎兵攻撃を行つたことを詰責した。然かしこれは彼れが間違つてゐるので、此の時彼れは確かに騎兵がイギリス軍の陣地を占領したこと、信じ、勝利を決定的にする爲めに、ケレルマンの胸甲騎兵に最後の攻撃をさせたのである。後年セント・ヘレナで述べた通り、彼れは斯く信じたればこそ、ケレルマンに「イギリス軍を追撃するつもりで進撃すべく命じたのである。故に此の最後の騎兵攻撃に關する責任は、全く彼れ自身の上になければならない。」

此の時期となつては、ナポレオンの注意力は、既にロシア軍の側面攻撃によつて攪亂されて居つた。然かし彼れはロシア軍を撃退してから、彼れはそれを撃退し得ること、信じたウエリントンの本陣を打ち破らんと全力を盡した。其の時の不安な形勢から見れば、ナポレオンは守勢を採るか、否思ひ切つて退却運動をすらすらすべきであつたのであるが、此の手段は、常に彼れに極力攻勢を取るべく命ずる彼れの本能の許さない所であつた。されば彼れはグルーシーがやがて到着し、ロシア軍を背後より衝擊することを想像して一切を賭した。然るにグルーシーは來らずしてナポレオンの運動は齟齬して了つた。ロープス氏が豊富な材料に據つて立派に證言する通り、グルーシーの行動には嚴酷な咎責を加ふべきものである。然かしナポレオンにも亦全く罪がないとは云へない。未だ一度も獨立した指揮權を執つたことのない騎兵の一將軍の判斷に凡べてを託任したのは、

重大なる判断違ひであつた。周知の如く、ナポレオンは近衛軍の最後の豫備隊を、ウエリントン陣營の中央目掛けて繰出したが、此の大なる努力もそれに匹敵する頑強な抵抗に會つて、遂に水泡に歸した。そして聯合軍の最後の進撃は、その前に在る凡有るものを掃蕩して了つた。

斯くてナポレオンの軍事的經歷は終末を告げた。仍つて吾人は彼れを滅亡に導いた性格上の原因の摘出に努めねばならぬ。而してそれは大體彼れの頭腦の硬化に歸納し得る。嘗つて彼れの頭腦は透明なレンズの様に働いた。又事物を計量する嚴密な天秤であつた。敏速なる方針の決定者でもあつた。此の最後のものは、最後まで残り、却つて力を増した位であつたが、然かし以前とは性質を異にして、事物を自己の所望に適ふ様に曲解し、或は自己の妄想を實在なりと信ずるものとなつてゐた。斯くの如き頭腦の退化は、他の偉大な武人にも起つた所のものであつた。ナポレオンに於ける此の傾向は千八百七年のチルヂット和約後早急に發生し、千八百九年のオーストリア遠征後に一層其の程度を増進した。千八百

十年彼れの帝國は擴大されたが、これは即ち誇大妄想狂の證據に他ならざるものであつた。此の妄大狂は、彼れの負擔を加重すると共に、それを克く處理する能力を毀損した。或人は彼れの没落の一原因として健康の衰退を擧げてゐる。自分は此の問題を注意して研究し、殊に千八百十五年について深く檢べたが、其の結果彼れの體力は晩年に於ても、殆ど衰弱しては居なかつたとの結論に達した。チールやウーセイの結論も亦同様である。ウ・イトルロー前後の彼れの活動は全く健康人のそれであつた。即ち當時衰弱してゐたものは、體力でなく、頭腦の働であつたのである。彼れ自ら曰つた通り『戰に於ては凡べてが精神的である。』

茲まで來ると、ナポレオンとウエリントンとを比較しない譯には行かなくなる。けれども詳細に論じることが出来ない。と云ふのは、二人は異つた平面上に活動し、そして兩平面は唯一度きりしか交叉しないからである。ナポレオンは南歐人の特色である熱情、活氣及び絢爛たる性格を賦與されてゐた。ウエリントンは生れた場所から云へばアイルランド人であるが、性質は同族と異り、アングロサクソ

ン人の特質である嚴格、慎重、正慮、不撓等を體現してゐた。性質と必要とから、彼れは主として防禦戦を行つた。イギリスの弱少な陸軍力は、あらゆる機會に節約しなければならなかつたので、彼が第一に考へたのは、軍隊を壊滅させないことであつた。然かしこれはナポレオンに取つては最下級の信條であつた。殊に彼れが晩年となつては、若し敵に十二萬の損害を與ふるならば、自軍十萬を失ふとも敢へてそれを意に介さなかつたものである。彼れは軍隊の熱情を無限に煽り上げ、それが奇蹟的忍耐に耐へることを豫期した。そして此の軍隊が斃れると、氣の好いフランスが彼の女の養子(ナポレオン)に刺殺されて蒼くなるまで、新募の兵は彼れの足跡から起つて此の奇蹟を繰返へした。これに反し、端嚴冷靜なウエリントンは戦争に際し、部下の兵に多くを求めなかつた。イギリス軍は彼等の天性である剛健を以て戰つた。ウエリントンはどんな場合でも、ウルムを占領する前にフランス軍がやつた様な長途の大強行軍によつて戦に勝つたことはない。又彼れは、ナポレオンがイエナの役後僅か二週間にプロシア全國を脚下に蹂躪したやうな

非常な離れ業の爲めに、軍隊を鞭撻したこともない。ナビーエは能くウエリントンの戦争を攻城槌の打撃に比し、ナポレオンの戦争を、凡べてのものを押流し、野山に溢れる、大波濤の揚隆と突進に譬へてゐる。

當然の結果、ウエリントンには大組織の計畫を立て、機到るや猛烈な衝撃を以てヨーロッパの運命を決する様なことは一寸出来なかつた。然かし彼れの兵力が敵より優勢であつた千八百十三年の一戦役に於ては、彼れの策動は、ナポレオンの作戦運動の多くに見る様に、非常に果敢で又其の結果は上首尾であつた。されば一概にウエリントンを安全な作戦計畫ばかりして、守戦に長じてゐたと主張するのは正鵠を得たものではない。確かに彼れは守戦の長者であつた。恐らく世界に初めて生れ出た最大の守戰的將帥であつたらう。然かし彼れが半島戦争中、ヴァラドリッドからヴィットリアの間で行つた駿敏な外線運動の連続は、ヴィットリアの戦鬪がマレンゴより善く戦はれたとは云へ、マレンゴ役のナポレオンの運動振りに比肩し得るものである。勿論ウエリントンはエチプト遠征やロシア征